

# 専門用語研究

Journal of the Japan Terminology Association

No. 6 1994. 02

---

|                               |                            |
|-------------------------------|----------------------------|
| 小特集 専門用語集の作り方(1)              |                            |
| 「小特集 専門用語集の作り方(1)」にあたり .....  | 編集委員会 1                    |
| 専門用語集の理想 .....                | 柴田 武 2                     |
| 用語集の作成にあたり検討すべき諸項目の現状 .....   | 中山 亮一 6                    |
| テレビジョン技術用語制定の経緯 .....         | 中村 欽雄 11                   |
| 医薬品名辞書ファイルの構築と利用 .....        | 大関 恵子 19                   |
| TKE'93ターミノロジーと知識工学会議'93 ..... | 藤原 譲・門條 司・平井歩実 25<br>仲本秀四郎 |
| 国内刊行専門用語辞典リスト(1992) .....     | 編集委員会 30                   |
| JIS 用語制定の動き .....             | 太田 泰弘 41                   |
| 書評 「日本語学-特集: 語彙分類・意味分類」 ..... | 光富 健一 44                   |
| 新刊雑誌紹介 TERMINOLOGY .....      | 影浦 峽 46                    |
| 投稿規定                          | 49                         |
| 編集後記                          | 50                         |

---

## 「小特集 専門用語集の作り方（１）」にあたり

本誌編集委員会

本号は、「小特集 専門用語集の作り方（１）」と題し、三つの論文を掲載した。本小特集の目的は、主に以下のことを探ることにある。

- 1) 専門用語集とは何か
- 2) 専門用語集の問題は何か
- 3) どのようにして専門用語集は作られるのか
- 4) 作る上での問題は何か

上記の問題は、専門用語集を利用する立場の人にも、作成する立場の人にも、専門用語を研究する立場の人にも、考えてほしい内容である。本小特集で、全てが解決するわけではない。その、とっかかりが得られれば良いと考えている。

三つの論文は、以下の意味から掲載した。

柴田氏の論文は、専門用語集の存在価値、使いやすい専門用語集は存在するのか、について意見を述べている。最初の部分は、ややむずかしい表現が続くが、その後の例は理解しやすい。専門用語集はある目的、例えば、用語の統一、その用語全体の体系提示から、異分野との意思の疎通のために作成され、活用される。この原点ともいえる部分を考える上で、柴田氏の論文はヒントを与える。

中山氏の論文は、用語集作成の諸問題を広い観点から述べている。扱われる問題は、特定分野のようであってそうでない。各専門用語集の特殊な問題は、実は、共通の問題でもある。中山氏の論文から、用語集の実状を感じることができる。

中村氏の論文は、テレビジョン学会の技術用語制定の経緯から問題点を述べている。これは事例としての意味も持つ。科学技術の進歩と用語概念の形成・淘汰の流れを感じることができる。これは用語集を作成する上で非常に参考になろう。利用者や用語の研究者も、この苦勞を知った上で議論する必要がある。

以上三つの論文を通して、最初の四つの問題を改めて考えていただければ、小特集（１）の目的は達成されたと思われる。

なお、本小特集の続編は、「小特集 専門用語集の作り方（２）」として、会誌 8 号に、専門用語集作成の事例を掲載する予定です。

（本小特集に対するご意見、ご感想等は、研究会事務局までお寄せ下さい）

## 専門用語集の理想

An Ideal Type of Technical Terminology

柴田 武\* SIBATA, Takesi

### 1. 専門用語集はだれのものか

ある学問分野で大家と言われるような人は、おそらくその分野の専門用語集などには目もくれないだろう。大家でなくても、その分野で独自の学説を打ち立てているほどの人も専門用語集を参考にしたりはしないだろう。

専門用語集を利用する人は、①専門課目の教育に当たる人、②その分野の初心者、③関連分野の専門家 というところであろう。このほかにも、④出版・放送関係の人も入れるべきかもしれない。

以上のように考えていいのなら、専門用語集は、①～④のような利用者の要望を満たすようなものでなくてはならない。

### 2. 本文のない索引

筆者の知る限り、専門用語集はすべて、語の音形から必要な専門語を探し出すリストである。このシステムは、一般の国語辞書、英語辞書、英和辞書などと同類である。語の音形から必要な専門語が探せることと、隣どうしの見出し語(専門語)がまったく無関係なことを考えると、これはいわゆる「索引」の性質を持ったものである。

索引があれば、「本文」があるはずである。しかし、専門用語の「本文」はあまり見たことがない。すなわち、本文も内容とする専門用語集にはお目にかかったことが少ないということである。ただし、最近の専門用語辞典には、概念体系をツリー(木)に示したものがある。これが「本文」にあたる。

したがって、専門用語集の「本文」とは、その分野の概念体系に該当する語の体系(語彙)ということになる。それは、専門用語が相互にどういった関係にあるかがわかるリストである。二つの専

門用語が同義か異義か。上下関係、包摂関係、対立関係などのどの関係にあり、さらに、どちらが上位で、どちらが下位か。どちらが含む方で、どちらが含まれる方か、といったことがわかるような内容である。

ある分野の専門用語が理想的に標準化されていれば、同義ということはあるべきでない。さらに、概念体系も一つしかないこともある。こういう場合は、本文の作成はかなり楽である。しかし、現実には、一つの概念に一つの用語という関係にしばり込むことは容易ではない。特に、専門用語の採否をその分野の複数の人による協議によって決める場合は、理想はまず実現できない。

それならば、同義の場合、その使い分けについて、また、使用者の違いなどについての説明が、「本文」にあってしかるべきである。それは、(1)～(4)の使用者のすべてにとって必要な情報である。概念体系も一つにしばり込めないならば、主なものを並べて、その違いのポイントについて説明することが望ましい。

各専門用語についての「定義」は、もちろん、その本文の中で示されるべきである。「定義」は、一般の辞典で言えば、「意味」(「語釈」)にあたる。専門用語集の本文とは、辞書でいえば「類語辞典」にあたる。

筆者は、辞書というものは、類語辞典のようなものが主体、すなわち本文であって、一般辞書は、その索引の役割を果たすべきものと考えている。両者を合わせると、本としてぼうだいなものになるところから、現実には、索引の各語に意味を与えるという便宜的な方法が採られている。

日本では、明治以前の辞書は、たとえば、室町・徳川時代の「節用集」という名の国語辞書は、類語辞典の性格を持ったものであった。完全な意味分類辞典もあったが、多くは、音形引きとの併用

\* 東京大学名誉教授

システムを採っていた。音形順は、当時イロハだったから、「伊(イ)」の見出しの下に、「天文」「地理」という意味分類があって、そこに該当する語をずらっとならべたようなものか、まず「天文」「地理」…と分類し、その下を「伊」「呂」…と音形順に並べるかのいずれかの方法を採用していた。このように、どのレベルかで似たことばを寄せることの方が辞書として健全だったと考えるのである。

さらに、すべての専門用語に分類番号をつけてほしい。それによって、番号だけから用語相互の関係の大体をつかむこともできる。また、それができれば、索引には、用語の語形と番号だけ示しておけば、本文へのリファーマも、ページ数を示すよりははるかに楽である。

番号は、必ずしも数字だけによる必要もなからう。イギリスの郵便番号のようにアルファベットとの組合せも考えられる。アルファベットも1字と数えて、番号は7けた以下に収める工夫も実際には必要である。7けたの7は、視覚的に一度にとらえうる最大の個数だからである。

### 3.索引の内容

索引は、索引というものの性質上、何で何が引けるかが課題である。まず、「何で」については、なるべく多くの手がかりから引けるよう、幾種類もの索引を用意する必要がある。まず、

- ①日本語から引けるもの、
- ②専門用語の大部分は、原語があって、その訳語であるから、原語(英語など)から引けるもの、
- ③逆引き、特に①の逆引き。

索引は、語の音形順に並べてであると述べたが、語の音形ということについて、いくつか問題がある。②については、英仏独といったローマ字を使う言語の場合は、ほとんど問題がない。今後、特殊な言語が専門用語として採用される場合は、多少工夫が必要になる。スペイン語のñ, デンマーク語のø, ノルウェー語のå, ポーランド語のó, ð, チェコ語のř, š などなど。しかし、これらは、ベースはローマ字で、それに符号をつけただけのものだから、ñはnのあと、øはoのあと、…のように処理できる。ローマ字以外の文字(漢

字を除く)を使っている言語については、どういうシステムで翻字するかが問題になるが、ローマ字に転写されてしまえば、並べ方については疑義は起こらない。

①、それに伴って③の場合はそうではない。仮名で示される音形の順のほかに、漢字からも引けなくては困る。「囊」とだけ書く専門用語(植物学・遺伝学)が文部省学術用語として認められている。しかし、この漢字は、常用漢字表にないから、その読み(音形)を知らない初心者もいるだろう。読みがわからなければ、仮名による音形順の索引からは探せない。「油圧」はユアツだから、「油穴」はユケツだろうと考えても、ユのところには出てこない。これは、アブラアナ(機械工学。船舶工学)であることは、「油」はユともアブラとも読むことを知っていて、両方にあたるという手間をかけなくてはならない。日本語ができる外国人の研究者にとって、これはかなり困難なことであろう。

仮名で示す音形順にも問題がある。五十音順に並べるというのは、極めて明確な方法のように思われているが、必ずしもそうではない。現行の仮名表示は、実は音形そのものではなく、字形と音形の混合したシステムである。

まず、①濁音、半濁音について。現在、おそらくすべての五十音順は、単語にあたる形の清音の仮名が終わってから濁音の仮名を出している。すなわち、「か」で始まる、たとえば「かん」という同形のすべての語が終わったあと「がん」が始まる。そして、「がん」が終わると、再び「かんあく」という清音で始まる語があらわれる。「か」の子音はk、「ガ」の子音はg、両者は調音のしかたは共通だが、無声・有声の違いがあって、別の音素である。だから、音声学、音韻論の立場からすると、「カ」で始まるすべての語、すなわち、たとえば「かんわ」が終わったあと、初めて「ガ(我など)」が出てきていいところである。また、伝統的な五十音図は、清音しかあげていない。濁音は、いわば別表扱いである。とすると、清音のすべてが終わったあと、すなわち、「わ」か「を」が終わったあとに、「ガ」が続くということになる。

現在のシステムは、音素のことも、文字（仮名の字形）のことも、文法（的単位）のことも考慮での総合処理である。

次に、②撥音のこと。伝統的な五十音図には「ん」は入っていないが、今は、五十音図が「わ」あるいは「を」で終わったあとに出す習慣（表外扱い）が定着していて、問題ない。

次に、③促音のこと。促音は、音声としては、次にくる子音によって、p, t, k, b, d, g, sのように変わるが、音素としては仮にQで表す単一の音素と認められている。この種のもは、もともと五十音図の中に入りきらない。撥音同様、表外扱いにすべきだと思うが、現実には、促音を表す字形（「っ」）が「つ」と同形で、ただ大小の違いがあるだけだから、「か」に対する「が」の扱いに並行させてある。ただ、「か」の場合と反対に、撥音を先に、「つ」はその後にという順序である。もちろん、単語をベースにしている。たとえば、「いっか」の同音語（一家、一下、一荷、一過、一箇、一顆）がすべて出たあとで、「いっか（五日、何時か）」が表れる。なぜ、この順が行われているのか、その理由は知らない。

次に④拗音のこと。拗音は、促音の場合と同様、小さい形の「ゃ・ゅ・ょ」を添えて表す。これは、促音の扱いと同様、拗音の場合を先に出すことになっている。たとえば、「きゃく（客）」の次に「きやく（規約）」が続く。

次に⑤長音のこと。仮名（現代仮名遣い）では、長音には3通りの表し方がある。

[ko:ri] / koRri / こうり（公理）

[to:ri] / toRri / とおり（通り）

[te:ri] / teRri / ていり（定理）

すなわち、「う」を添える場合、「お」を添える場合、「い」を添える場合である。前2者は、「お段」の次、後者は「え段」の次の場合である。同じ長音なのに、それぞれ「う」「お」「い」のところで、別々に扱われる。字形が同じだからである。

たまたま、「こうり」は「小売り」をも表して、この表記があいまいなことがわかる。この場合、「小売り」を先に出し、「公理」をあとにする。どうしてそういう順番なのか、この理由についても知らない。

なお、「ていり」については、これは長音ではなく、二重母音〔te:ri〕だという意見もある。しかし、東京人の日常会話の発音は、例外なく長音である。この種のを長音に発音することによって、

[e:ri] / 'eRri / えいり 営利、鋭利

[eʔiri] / 'e'iri / えいり 絵入り

のようにはっきり区別することができる。

長音については、外来語の長音の扱いがある。それには二つの場合があって、いま2種の配列が行われている。長音を表す符号「ー」を仮名1字にあたる文字と認めるか、単なる符号としてしか認めないかの立場の違いによる。前者は、先行する仮名の母音にあたる文字（アイウエオ）が繰り返されていると考える。「ケーブル」は、「ケエブル」とみなして、「けうとい」の次のグループに入れる。これに対して、第2の立場は、長音符をないものとして扱うから、「ケーブル」は「けぶる（煙る）」の次にくる。国語辞典は、前者に従い、百科事典は後者に従っている。百科事典を兼ねた国語辞典と言われる『広辞苑』は、第一の方法によるから、やはり『広辞苑』は国語辞典である。

語の音形による見出しにまつわるあいまいさは、ローマ字表記に移せば一挙に解決する。仮名にしても、定理を「てーり」、公理を「こーり」と表せば長音の問題はなくなる。しかし、促音についてはどうしようもない。また、正書法の伝統があるだけに「てーり」「こーり」と書くのはやはり抵抗があろう。それならば、見出しはローマ字表記ということが考えられる。ただ、多くの人がローマ字書き日本語に慣れていないということがある。『文部省学術用語集総合リスト』（『言語の標準化』プロジェクトの研究成果報告書.1985.3）も『学術用語集集成』（財団法人日本科学協会、1988年5月）も日本語見出しはローマ字表記で、索引上のトラブルはまったくない。

仮名（現代仮名遣い）による見出しの順序でもうひとつ問題になるのが、語意識による「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」の書き分けである。「もとズク」「ちからズク」「つまズク」と並べて、どれに「つく」という語を意識するか、これは個人にとっ

て違うだろう。いまのところ、「もとづく」だけ「もとづく」とすることが一般的になっている。「地震」は、「じしん」がいま標準的とされているが、「ち(地)」を意識する人も少なくあるまい。ある辞書では、「融通」を「ゆうづう」と扱っている(『岩波国語辞典』)。このことばを、文字を覚えるはるか以前から耳にしている筆者にとっては、「つう」とは意識できない。

これも、ローマ字書きにすることによって解決する。

#### 4. 分野間の用語集

文部省の学術用語の場合、各分野の用語集は、25冊以上出ている。それらの総索引が上に引いた2冊の本である。

これを見れば、まず気づくことは、分野間の標準化の必要である。同一の原語が異なる日本語に訳されている。たとえば、

ventilation 換気《化学, 機械, 建築, 船舶,  
原子, 農学, 土木, 採鉱》  
通気《機械, 建築, 採鉱》  
機械通気《採鉱》  
通風《電気, 船舶, 土木》

一見、四つの訳語はどれかに標準化できそうに思われる。多数決からすれば、「換気」ということになる。

しかし、よく見ると、同じ機械工学で「換気」も「通気」も使っている。これは、日本で展開した新しい区別に対応するものかどうか。あるいは、同一概念を表す複数の訳語に過ぎないのか。「本文」がなくては、門外漢の筆者には見当がつかない。土木工学でも、「換気」と「通風」の二つを出している。

今度は、原語が異なるのに訳語が同じという場合である。

denpan 伝搬 dissemination 《農学》  
propagation 《地震, 機械》  
transmission 《動物, 農学》

同じ訳語が三通りの原語に対応する。ことに農学では、dissemination も transmission も「伝搬」と訳しているが、これで困ることはないのだろうか。これについても「本文」がなくては何とも言

えない。

分野間の標準化は、實際上、極めて困難であろう。しかし、学際的な研究が進めば、それに参加する各分野間で共通の用語を持つことが必要になる。ここでも、理想は、同じ概念に同じ語をあて、異なる語には異なる語を当てること、すなわち一対一の対応にある。

専門用語そのものでなく、表記の違いは容易に標準化できると思う。たとえば、

after(-)burning あと燃え《機械》  
アト燃エ《船舶工学》  
後燃え《化学》

については、たとえば、「あと燃え」に合わせることは可能であろう。また、

gas burner ガスパバーナ《機械工学》  
ガスバーナー《化学》

などは、表記と語形にまたがる問題であるが、たとえば、「ガスバーナ」にあわせることはそう困難ではなからう。

専門分野内の用語であれば、それが、相互理解の手段として有効である限り、どんな音形、どんな表記を持っていようと構わない。専門用語のうちには、「ガスバーナ」のような一般用語と共通のものもあり、何かの偶然で専門用語が一般用語化することがある。そのとき、専門用語集に複数の音形、複数の表記が存在しては、実際上困る。一般用語に採録されるときは、上の例など、おそらく「ガスバーナー」の音形を持っているだろう。しかし、専門分野で「ガスバーナ」と言い、「ガスバーナ」と書くならば、一般用語でもこれを採用することになる。現在でも、computer の訳語を、

コンピュータ(一)

のように示している辞書(『三省堂国語辞典』)がある。これは、もともとの「コンピューター」と専門用語としての「コンピュータ」の両方とも認めるという方針によるものである。専門用語は、このようにして一般用語の中に入り込んでいく。

専門用語は、専門家だけのものではない。

## 用語集の作成にあたり検討すべき諸項目の現状

Points to be checked in Compiling Dictionaries

中山 亮一\* NAKAYAMA, Ryoichi

### 1. 総合的に

#### 1.1 視点

今回は、広い意味の用語集について、作成、編集の上で、努力、苦心が払われた実例から、その使いやすさの観点において、現状を見ていきたい。

#### 1.2 種類

文部省の学術用語集は、将来はともかく、少なくとも現在においては、意味づけ、すなわち説明文はまったくなく、読み方が日本式ローマ字で書かれ、単語と対応英語だけが並べてあるだけである。NHKの新用字用語辞典は、常用漢字と現代仮名遣いと送り仮名の付け方しか書いていない。広い意味では、ハンドブックも用語集と考えられる。また、数か国語を並べ比較したもの等いろいろあるが、一般的には、辞書、辞典がイメージされる。

#### 1.3 内容

非常に専門的なものから入門的な用語の採用まであり、少数語を詳しく解説する方向もあれば、できるだけ語数をたくさん増やすことを目的に編集されたものもある。採用する言葉にウエイトを置き、ある比率で専門語、一般語の数を決定する場合も出てくる。言葉の説明文についても、ある比重を置き、長いもの、短いものを併用する時と、大体、どの単語についても、同じ位の長さで解説しているものもある。専門語といっても、所謂、その業界だけのスラング的な言葉までを含ませるかもしれないし、別に決まりはない。

専門分野の言葉であっても、基礎的なものの扱いに関しては、これまた様々である。なんとなくわかっているような気がするが、厳密な意味では取り扱う内容を持っている場合もある。

大変に古い言葉を歴史的価値ありとするか、死語にするかも問題となる。逆に、最新のもの、特にある人、ある所で使い始めたばかりのような言葉を積極的に情報として取り入れるかも検討の対象となる。文部省の学術用語は、法律文に使用するという一つの基準が選定の際に考慮される。すなわち、はっきりと体系を建ててから語を集め、さらに、落ちがないかまで、手を充分にかけたものほど使いやすい。

#### 1.4 対象

読者を先ず決定してから作成に入るやり方もある。高校生、大学生、社会人になりたて、その業界に初めて参入した者等、対象者の範囲の取り方で言葉の集め方が変わってくる。この場合、読むのは確かに個人には違いないが、学校、会社、図書館に備えつける資料的なものも用語集にはある。

#### 1.5 形式

電子化辞書も出始めているが、まだ主流は印刷物である。縦書き、横書きの問題から、検討項目は大変多い。したがって、これに関しては、後に表記方法の項で触れることにする。

#### 1.6 出版

レイアウト、編集などは、コンピューターを使用するにしても、印刷する場合には、先ず発行部数が検討の対象となる。印刷費は、部数が増加する割には増えない。基礎的な用語集ならば、かなりの在庫があっても、年月と共に捌けていく可能性もある。一方で、コンピューター関連では、ある版が出たら、もう直ちに次の改定版の準備に入らないと間に合わないほどに変化が激しく、したがって、その面から1回の発行部数を決めなくてはならない本もある。

#### 1.7 収納語数

直接に販売単価と関連するので、説明文のある

\* 前日本テレビ

場合は、その長さを含めて問題となる。特に専門的な言葉は、読者によって知りたいものが異なる場合が多く、必要と思う語がないと、その価値がないに等しい用語集になる。

### 1.8 単価

確かに安いほうが買いやすいが、必要のある人は無理を押しでも買う。値段が購入を決める第1の要素ではない点が、専門用語集の特徴かもしれない。

### 1.9 著作権

帰属するところを明確にする必要があるのは当然だが、原稿を書く際に多人数に依頼した場合、流用する、すなわち、ほかの著作権を犯す事例が存在した。案外、発見しがたい。

### 1.10 原稿料

説明文の長さ、語数、監修、編集等に関係してくる。改定版、再版の時に、プロジェクト・チームが解散している場合もあるので、出版社との個人的な連絡が必要になる場合がある。

## 2. 製作に当たり

### 2.1 表現

説明文が多数の作者による場合には、個人差があるので。この修正に責任者が書き直す権限を初めから明確にして、原稿を依頼する例がある。また、終始一人で書いてしまう場合も見られる。

### 2.2 広義語

多分野に関係する言葉が、そのすべてを含む説明となっていない場合がある。

### 2.3 語順

カナ、ひらがな、漢字と並べる例もある。また、すべて発音の順に並べるものもある。この場合に、長音を含む言葉の扱いが違う例がある。アルファベットで書かれた言葉を別に、ABCの順に並べる方がわかりやすいとする扱いが一般的であるが、外来語をカナ表記するものとの区別が難しいので、カナ表記を採用しない人もいる。ハンドブックは、ある体系のもとに記述を行うので、所謂、語順が他と違う。

### 2.4 略字

見出しには、採用しないですべて索引中に収める例がある。この場合には、フル・スペリングを

併記するのが普通である。略字のみの部分を独立させて、別に編集した方が見やすいとする考え方もある。また、DNAとか、エイズ等、略字の方が一般的な場合に、DNAは略字だがエイズも略字とするか、一つの言葉と考えるかは議論が分かれる。アメリカ航空宇宙局をNASAをナサと書くことはあまりない。

### 2.5 漢字とカナ

現在はカナ表記が増えているが、漢字化された文字のほうが見やすい。例として、長い間、アンテナと空中線とは学術用語に共存した。系とシステムも、両方とも使用されている。複合語をカナで書くと大変に長くなるので、考慮の対象となる。共存する場合には、いずれを優先させるか、使用頻度によるか、漢字を優先させるか、いろいろな例がある。編集者の意向が左右する大きな部分である。

欧文をカナ書きする場合に L と R, SI と CI と THI, B と V の区別をしないことからくる混乱も検討の対象となる。

### 2.6 関連語、類語、同意語、反意語

普通は説明文の終わりに括弧に入れて(参一・・・・)等とするが、著者に依頼した場合には、統一が取れないことが多い。基準が難しいので編集時に責任者が一人で決めることもある。ここで重要なことは、1.2の内容に述べたように、語の選定基準の明確さである。1つの幹から大枝へさらに、小枝への体系、シソーラスがしっかりしていないと大変に使いにくい用語集になる。特に、複合語を採用する場合に、それぞれの語を単独に別に採用する場合、索引に載せるのせる場合等、事前に検討されているものはやはり使いやすい。

### 2.7 不確定対策

使用者や場所によって使い分けが違う例がある。例えば、波形において、上下の飛び出しをオーバー・シュートと言う人と、上をオーバー、下をアンダー・シュートと使い分けする人がいる。言葉は名詞の形で採用するのが普通であるが、動詞、形容詞からのもの、例えば 明るさ、読み書き等で対応英語に苦心しているものがある。bright, brightness, read and write, reading and



writing。

また、一般語として ビデオは、範囲の不明確な例の一つである。VTRを意味したり、カメラやモニターをも含んだり、画像として使用されたりする。テレビと書くと、受信機を指すことで、テレビジョンと区別する考え方があり、テレビは、テレビジョンの略としては扱わなかった。

## 2.8 索引

用語集を使いやすくするために、説明文のあるものにはほとんど付いている。極論すれば、索引の充実さで用語集の価値、使いやすさが決まるとさえ言える。この視点から種々の例について見てみると、次のようになっている。より使いやすくするために、文中に使われた言葉まで、これはと思うものを索引に記載している例として

ASAHI PRESSの Japanese-English, Modern Colloquialism Revised では、見出し語は、太い数字、説明文中の語は普通の数字でページを示し、使用効率を上げ、さらに和英の辞書にもかわらず、英語の単語、熟語による索引まで付いていて、説明文975ページ、索引224ページと、約23パーセントを索引に当てている。

次に、特徴があるのは、岩波情報科学辞典のもの KWIC式索引である。ある言葉を中心に、纏めて関連語や複合語が調べられるようになっていて索引の重要性を効果的に活かした例である。強いて言えば、ハンドブック的発想とも言える。次に、その他の本や、辞書の索引例を、参考に列挙してみる。

### 音響用語辞典 (コロナ社)

英和対応の形でABC順に、略字はそのまま、フルスペリングなしで、ならべられている。A-Zの後に、ギリシャ文字、最終部には数字で始まる。例えば、110番 TYPE PLUG, 110 プラグがある。

### 電子通信用語辞典 (コロナ社)

上記、音響用語辞典同様、英和対応、ギリシャ文字、数字の後に、略字のABU, RAM, VHF等が索引として、載っている。

### 経済学辞典 (岩波書店)

ページ数の表示は、1 2 3 r, 4 5 6 lのように左右を分けてある。さらに、見出し語は大きな数字説明文中の用語は、小さい数字にしてある。

さらに事項索引に、手形市場、天保改革等、欧文事項でAIA (American Institute of Account), Community of Interest,

また何故か、ロシア語事項索引がある。また、人名索引もあり孫文、ジンメル、Nyquist, Shannon等と書かれている。

### テレビジョン用語辞典 (コロナ社)

英文索引は、英和対訳で、略字もアルファベット順で、中に含まれている。

### コンピュータ用語辞典

コロナ社は、英和対訳

ナツメ社は、欧文のみの索引である。

### 新選漢和辞典 (小学館)

先ず、見返し(前)に、部首で索引できるようになっている。終わりには、絵画索引、訓索引があり、読めるなら訓索引、読めなければ画索引を使用する。

### テレビジョン画像工学ハンドブック (オーム社)

Aから、Wまでの中に、カナ表記の欧文語を入れてある。Aから始まる英語索引は、その後にある。

### デジタル テレビ技術 (日本放送出版協会)

この本は、用語集ではないが、すべての言葉を“あ”から“わ”までに含め、“あ”の部に、IIR フィルター、“え”の部に、ECL (emitter coupled logic) 等が入っている。

### 国語大辞典 言泉 (小学館)

絵画索引の後に、新旧仮名づかい、文法があり最後に、アルファベット略字表が、付録として付いている。

### 現代用語を英語にする辞典 (グロービュー社)

和文索引が “あ行” から, “わ行”

英文索引が A-Z,

見出し語は、日本語/英語の形式で本文に書かれている。

### 画像の記録と再生 (コロナ社)

索引は、ABC順で、Aにアドレス、AST, Bにバッファ、Dに電子手帳等とある。

変わった例で、旧制高等学校の人名簿の索引がABC順で、“あ”は、いずれにしても、先頭であるが、馬場等が、次になる物がある。

### 日本産婦人科全書 (金原出版)

人名と物名に分け、共にABC順で、欧文も日本語も書いてある。

## 2.9 カバーする範囲の明確化

各用語には、広義と狭義の意味を持つのは当然であるが、できるだけ使い分けを考えている用語集もある。例えば、方式は、世界的にオーソライズされたものとし、手動や自動は、方式ではなく、方法あるいは単に、法、方または式で示す等である。特に、技術的に技法という語を使う時もある。また、規模の点で、設備 (facility)、機器 (equipment)、器具 (device)、部品 (parts)、の順で小さく分類し、使用場所を考慮する例もある。器具は小さいもので、単体として機能を持つものと考えられるが、現在は、部品のような小物ですでに多機能な物が出現しているので、扱いに苦労している面が見られる。これをunitとすべきとの説もある。

## 2.10 対立概念

例えば、フィルムとテープ、ビデオとシネマ等。これをビデオとフィルムでは、内容と材料で不自然とし、V-F変換でなくV-T変換とする等注意を払った編集が行なわれている例も多い。

## 3. 表記の方法では

### 3.1 ナカボチ

漢字は意味を持つので見てわかり易いが、仮名は、音のみの表示でしかない。したがって、複合語をカナ書きする場合には、ナカボチを入れる例が多い。学術用語集では採用していない。デジタルワークステーションシステムを、やはり、デジタル・ワーク・ステーション・システムと記す方が、意味が見てわかりやすいとする人々も多い。

これは、概念的に、2語、3語か、1語かの問題とも関連するわけであるが、電報文の例にもある様に、長いカタカナ書きは、とにかく、読み難い事は事実である。学問的に考える、語構成の問題よりも実用上、読み易さから検討した用語集も多い。

### 3.2 語尾長音

英語の語尾 er,or,ar に対して、長音すなわちーを付けるか付けないかは、物理学会では付け、電気系は付けない。これには一つの説があり、昔、

モールス電信で、1字でも手間を省くことを考えたためとか、コンピューターの容量が貧弱で、1文字でも削りたい頃の遺物ともいう。この矛盾は語の中にもあり、長音は、省略の対象としていないことで、オーバーシュートをオバシュトとは、語尾長音を切るグループも決して書かない。したがって、フィルターは、フィルタとは別物であって、光、流体に対する言葉であり、フィルタは、電気系の物。filter に二つの日本語が存在する。これだけコンピューターの容量が増えた現在、この点からの問題はもうないという反面、縮めるのが好きな傾向から、戻らないとも言われている。言葉のデータ・ベースを作成する時、電子化辞書等、次の項目に出てくる、B、Vの仮名表記と共に、当分は混乱が続くそうである。

### 3.3 カナ表記

最近では、国語審議会でも、外国語をカナ表記する際、できるだけ源音に忠実に書くように、V、Dをヴイやデイで表すことができる等、幅広い対応を取り始めた。したがって、ビデオは、ヴイデオと書いて良いことになる。この変化によれば、前項の長音も、源音に忠実となるから、付けたいとする向きも出てきた。ステンレス・スチール・カッター等、カッタでは、勝つたと聞こえるのが問題だとする。要は母音で終わる日本語では完全には表記できない外国語なのであるが、読みと発音は別で、コンピュータと書いて、コンピュータと読めと言う人もいる。ただし、これは元の他国語を知ってなくてはできない。これからますます、国際交流が増えるはずなので、国語審議会も対応を変えたとも思えるが、現状は、なかなか統一が取れず、それぞれの分野の人々が苦労している。また、一方、カナで書いた言葉はもう日本語だとして、まったく気にしない方針を取るグループも存在する。定説がない混乱期にあるともいえる。ディスプレイ、ヂスプレー、デジタル、デイジタル等、極端にいえばいかようにも書ける。共通して使えない現状で、大変、不便な日本語になっている。

### 3.4 省略

漢字は意味を持つから良いが、カナを詰めることは、専門語では避ける傾向にあるのは当然かも

しれない。一般語 オレンジ・カードをオレカと書くと「俺か」とさえ聞こえる。パンティー・ストッキングがパンストならば、コンビニエント・ストアは、コンビニでなくコンストだと言った人がいる。学術的には、やはりほとんどがフルネームで処理され、日本語を必要以上には混乱させぬよう注意を払っているようである。

### 3.5 対応外国語

まずは、英語で表記するのが普通である。英米語で綴りが異なる場合には、米語を採用する例が多い。

### 3.6 読み方

学術用語ではローマ字をすべての言葉に付けて、なんと読むかを示している。

### 3.7 数字

現在は、左横書きの場合には、数えることのできるものは算用数字が主流になってきた。漢字との組み合わせにおいても、3原色、5角形と書く例が多い。特例として、万、億、兆等が読みやすいとして使用される。また、数十人、数百人などでは、数そのものは小さいが、習慣的に、漢数字を使用しているようである。概略を示す時には、例えば、2-300人とは書かず、200-300人と範囲を明確に書く例がほとんどである。

### 3.8 コンマ、ピリオッド

富士通ドキュメントサービスの松下氏の指摘で文および数字の、切れ目と終わりに使用する、  
。の組み合わせに統一がない。コンマ以下等と書く時の意味に注意とのこと。

## 4. 説明文の構成に関して

読みやすい用語集の特徴を見てみると、大体次のような構成を取っている。また、言葉は、意味、内容、範囲が時と共に変化するので、あくまでその時点における説明で、定義ではないとする傾向にある。定義にする場合には、範囲を限り狭義で纏める。JIS等がこれに相当する。

### 4.1 単文

極力、修飾語、句を省いてある。関係詞も使用していない。例えば・・・で・・・を言う、・・・のところの等の記述が見られない。

### 4.2 記述順序

まずそれは何かが書いてある。すなわち、一番大きな概念として何に属し、次にやや狭い概念ではどの分類になるかを考えて説明を始める。それから何からできているか、何に使われるか、関係語は等、内容がある決めた順序に従って書いてある。また、最初に雛形の例文を著者に示し、集まった原稿を加筆・修正しているのがわかる。

### 4.3 文中に出てくる言葉を、その文中で説明してはいない

(例) クロマキー の説明文

特殊効果の一種。通常ブルーバックを背景とし、人物、物体像を得る。これをキーイングし、他の画面に嵌め込むテレビ技法。ブルーが顔色に一番影響が少ない。

(参) スクリーン・プロセス、ライン・クロマキー、キーイング。

(修正前) カラー・テレビジョンで ブルー・バックの前に人物を置き、テレビカメラで撮像し、これを別な絵に切り抜き嵌め込む(キーイングと言う)を行なうところの特殊効果をいう。

### 参考書

1) 専門用語研究 No.5, 1993.07

同誌に掲載されている「第6回専門用語シンポジウム記録：専門用語の生態学」。専門用語辞典の体系的構成法、用語の造語メカニズム、専門用語の命名に於ける諸問題

2) 専門用語研究 No.7 1994 春、発行

「第7回専門用語シンポジウム記録：専門用語の作られ方」。専門用語の語構成について、業の一般名はどう作られるか、翻訳用語集の作成と管理、を参考にされればさらに細部について明確となる点が多いはずである。

## テレビジョン技術用語制定の経緯

Enacting the Tenms of Television Technology

中村 欽雄\* NAKAMURA, Norio

### 1. まえがき

テレビジョン学会(以下学会という)のテレビジョン技術用語委員会(以下委員会という)は、1955年6月(S30年)に発足し、1990年10月(H2年)にテレビジョン技術用語の標準化という目的を一応達成して解散した。このとき提出された報告書には、審議結果の総括として「テレビジョン技術用語一覧(50音順)」(約1100語の用語を選定して50音順に配列し、対応英語、分類番号を付した)、「テレビジョン技術用語集」(その約6割に意味付けを付した)が含まれている。

委員会は、はじめは用語選定の範囲を「放送を含むテレビジョン技術」およびそれに関連する用語としていたが、学会の担当する分野が「放送技術と画像エレクトロニクス」、さらに「画像情報工学と放送技術」へと変貌してゆき、それに伴って用語選定の範囲も拡大した。さらに新しい概念が生まれ新しい技術に進展して、これを記述するための新しい用語の制定と用語に対する意味づけが必要となった。

以下委員会の活動の経緯を述べる。

### 2. テレビジョン技術用語制定の経緯

テレビジョン研究の歴史は前世紀末にさかのぼる。画像を離れた地点に送るためには、まず画面を数多くの画素に分け、水平方向に、つぎにその少し下を再び水平方向になぞっていき、画面全体にわたって繰り返す。これを水平走査および垂直走査という。走査に対応する画素の明暗を電圧に変換すると、時間とともに変化する画像信号が得られる。逆に走査点に画像信号の時刻毎の値によって明暗をつけて再構成すると画像が現われる。

初期の走査方法は送信側ではニポー円盤やワイラー鏡車による機械式のもの、受信側では同様な機械式の他にブラウン管によるものが考えられた。ブラウン管は蛍光面と電子銃をもつ電子管で、電子ビームを水平および垂直方向に動かして蛍光面を走査する。蛍光面は電子の衝突によって発光し、このときビームの強さを画像信号の強弱によって変化させると、面上に画像が得られる。これを発展させたものが現在の白黒およびカラー受像管である。

ブラウン管は送信のためにも用いられた。すなわちブラウン管の面上の光点を水平および垂直方向に動かし、これをレンズによって被写体表面に投射して走査を行ない、反射光を光電管によって受光して電気信号に変換し、画像信号を得る。これを飛点走査器という。

1931年(S6年)にイメージディセクタという撮像管が発表された。これはブラウン管状の電子管の前面に光電面をもち、光電面は光を当てると電子を放射して電圧が変わるので、面上にレンズによって光像を投射し、電圧の変化を電子ビームで走査して画像信号を得る。

動画に対処するためには画像を毎秒数十回の割合で撮像する必要があり、また精細な画像を送るためには画素数を多くしなければならず、画像信号の増幅や伝送に必要な周波数は必然的に高くなる。当時の真空管と回路技術は漸次この要求を満たしつつあった。

1933年(S8年)に発明された撮像管のアイコノスコープは画期的な高感度をもち、本格的なテレビジョン時代の到来が期待された。しかし第二次世界大戦の到来によってテレビジョンは中断された。

戦後、実験放送の時期を経て1953年(S28年)にテレビジョンの本放送が始まり、また国内のメー

\* 東京電機大学名誉教授

カーが14型受像機を初めて製造販売した。マイクロ波によるテレビ中継回線も東京・名古屋・大阪間に設けられた。これに先立って標準方式をどうするか、とくに電波の占有する周波数の幅（チャンネル幅）を米国方式に合わせて6 MHzにするか、それとも将来のカラーへの発展に備えて7 MHzとするかが議論の中心となり、結局米国の方式を採用することになった。

1960年（S35年）にカラーテレビの本放送が始まった。これは米国のNTSC方式と同じもので、電波の周波数帯域は従来の白黒テレビジョンと同じく6 MHzで、かつ従来の放送に対して両立性をもつ。すなわちカラー放送を白黒受像機で、また従来の放送をカラー受像機で（いずれも白黒画像で）受信できるので、送信設備および受信機のカラーへの切り替えに際して混乱が少ない。その前年に国産のカラー受像機も発表されている。

テレビジョン技術用語委員会が設けられたのは、白黒テレビジョンの本放送が始まって間もない頃であった。当時の審議資料をみると、黎明の時期にあったカラーテレビを含めて、テレビの方式や伝送方法、画像信号および制御あるいは走査用信号に関する名称、各種回路や機器の名称、撮像管・受像管その他の電子管、光学的部品などの名称、視覚、とくに心理物理的な色とその知覚に関する用語などが審議の対象となっている。

選定された用語と対応英語は学会誌の1964年（S39年）7月号に「白黒テレビジョンに関する用語（第1回発表）」として掲載された。用語数は167語であった。このときは、カラーテレビに関する用語の採用は時期尚早であるとして見送られた。

1966年（S41）1月号学会誌に「カラーテレビジョンに関する用語」155語が、半数は英語だけ日本語なしで、また翌年12月に日本語訳をつけて145語が発表された。

1974年（S49年）9月号学会誌に、それまでの審議結果を集大成した「テレビジョン技術用語集」が発表された。用語560語が対応英語、意味づけを附して収められている。

### 3. その後の進展

テレビジョンはその後、ケーブルテレビジョン、放送用および家庭用VTR、通信衛星によるテレビ番組の中継、放送衛星・通信衛星による放送へと発展し、ハイビジョンなども登場した。その間、撮像管の進歩、受像管の進歩と液晶ディスプレイの登場、真空管から固体デバイスへの変遷、デジタル信号処理の登場も注目される。

他方、テレビジョンに基礎を置いて、画像エレクトロニクス、あるいは画像情報工学が生まれた。ランドサットから得られた情報による地表の疑似色彩画像処理、コンピュータトモグラフィー、その他見えないものを可視像に変換する技術、コンピュータグラフィックス、仮想現実感処理などが例で、それらは枚挙に暇がない。

1968年頃からCATV（ケーブルテレビジョン）、1982年頃から宇宙通信、1986年頃から映像と音声を含む衛星放送、文字放送、ハイビジョン、および液晶関係用語が審議された。また、既に採用されている用語や意味づけを見直して、用語を補充したり採用を取り消したり、表記を変更したりした。

1986年（S61年）に、用語の審査を円滑かつ効率よく行なうため、「テレビジョン技術用語審査基準」を定めた。これは委員会の目的を明文化し、従来からあった選定および表記法の基準を見直し、より明確に記述した。続いて用語の分野別の審議や見直しの便のために「テレビジョン技術用語の分類の手引き」を、説明文の構成や体裁を統一するために「テレビジョン技術用語の説明文の作成要領」を定めた。「審査基準」を文末の付録に示す。

委員会における審議の結果はすでに述べたように順次学会誌に発表された。また「学術用語集電気工学編（増訂2版）[文部省]」の改定に当たり、放送・音響関係の用語の整理・選定作業を行なった。委員の一部は「テレビジョン用語辞典（テレビジョン学会編）」の編集にも携わった。

### 4. 用語配列の順序

下に「テレビジョン技術用語集（50音順）」の一部を、併せて分類番号（2種）、用語、対応英

語を示す。

辞典、用語集などにおいて用語を配列するとき、種々の順序が考えられる。因みに「学術用語集（文部省）」や「電気工学用語辞典（技報堂）」では用語の読みをローマ字で表わし、これをアルファベット順に配列している。「電気用語辞典（コロナ社）」では読みを仮名書きし、50音順に配列している。

本用語集は用語の読み50音順をもとに配列し

た。すなわち（1）英字（その他）を含めて読みの最初の音（ア、イ、・・・）を50音順とし、（2）つぎに同じ音のなかでは最初の文字によって英字（その他）、片仮名、平仮名、漢字、数字その他の順、また同じ字種では便宜的にJISコードの順とした。仮名や漢字の視覚上の性質から、読みの順だけによって配列するよりは見易いようである。ただ英字（その他）はやや異質の感じがするのでまとめたほうがよいかもかもしれない。

| 分類番号  | 用語                   | 対応英語                              |
|-------|----------------------|-----------------------------------|
| 63    | LAN                  | local area network                |
| 11    | RAM                  | random access memory              |
| 33    | ライブエンド               | live end                          |
| 12    | ラインセクタ <b>【走査線】</b>  | line selector                     |
| 11 86 | ラインセンサ               | line sensor                       |
| 51    | ラジオダクト               | radio duct                        |
| 03    | ラスタ                  | raster                            |
| 03    | ラスタひずみ               | raster distortion                 |
| 53 54 | ランレングス符号             | run length code                   |
| 12    | リミット                 | limiter                           |
| 72    | リモートセンシング            | remote sensing                    |
| 12    | リングング                | ringing                           |
| 01    | 利得対雑音温度比（GT比）        | gain to noise temperature ratio   |
| 04    | 立体テレビ [ジョン]          | stereoscopic television           |
| 04    | 両立性                  | compatibility                     |
| 01    | 量子化                  | quantization                      |
| 01    | 量子化雑音                | quantizing noise                  |
| 12    | 輪郭補正器                | contour corrector, edge corrector |
| 13    | ルミネセンス               | luminescence                      |
| 74    | レーザ                  | laser                             |
| 11 74 | レーザダイオード（LD）         | laser diode                       |
| 43 74 | レーザ録画                | laser video recording             |
| 33    | レコード                 | record                            |
| 33    | レコードプレーヤ             | record player                     |
| 03    | レジストレーション（重合せ）       | registration                      |
| 64 53 | レンジビット <b>【衛星放送】</b> | range bit                         |
| 11    | ROM                  | read only memory                  |
| 34    | ローキーライティング           | low-key lighting                  |
| 01    | 漏話                   | crosstalk                         |
| 33    | 録音                   | sound recording                   |
| 40    | 録画                   | picture recording                 |
| 04    | Y/C分離                | Y/C separation                    |
| 82    | ワークステーション            | work station                      |
| 33    | ワウ・フラッタ              | wow and flutter                   |

## 5. 技術用語および説明文作成における問題点

### (1) 用語の制定

委員会の目的は「画像情報工学と放送技術」（はじめは「放送を含むテレビジョン技術」）に関する技術用語を整理統一し、用語の意味を明らかにし、その正しい使用法の基準を与えることであった。また用語の種別としては、上記に直接関係する学術用語、基礎となる概念をあらわす用語、および放送の現場で使われるいわゆる現場用語を含めるものとした。

用語の制定に当たっては、まずこの分野を表現する概念を合理的にかつ過不足なく選定し、これを表現する適切な用語を制定し、その意味を明らかにすることが必要である。しかし一方用語は自然に生成するもので、従来の用法や慣習も無視できない。いわば用語は“生き物”であって、その枝葉は自然に伸びる性質をもっている。その性質を生かした上で、姿を整え、良い花や実を結ばせるのがこの委員会の目的であると考ええる。

特に新しい概念に対しては新しい用語を用意し、新しい意味づけをすることが必要である。ここで概念とは基本的なものの考え方や認識の在り方から人の行動のしかた、あるいは製品（機器）やその部品から使用法・ソフトウェアに至るまで、極めて幅が広い。

### (2) 用語の生成と軌道修正

用語の生成には (a)既存の用語を組み合わせて新しい用語をつくる、(b)既存の用語に新しい意味を与える、(c)既存の用語にかかわらない新しい用語をつくる、(d)外国語の読みを仮名書きする、(e)外国語のアルファベットを組み合わせた略語をつくるなど、種々の様相がある。

「自動制御」は (a)の例で、目標値を定めてフィードバックによって状態を目標値に限りなく近づけることをいう。(b)の例に「カオス」がある。これはもともと天地創造以前の混沌をいうが、近年、厳密に記述された非線形微分方程式の解が一見混沌とした結果を生ずることが知られ、この意味で定着している。日本語の表記では「混沌」は従来の意味、「カオス」は新しい意味と使い分けられる。また情報量の単位として用いられる

「ビット」は (binary digit) を縮めて (bit) として作られた。

新しい用語の生成を容易にするためには、従来の意味にあまりこだわらず、必要に応じて多少の意味のづれや拡大解釈が出来ることが好ましい。

自然発生的に生成された用語には軌道修正が必要になることがある。つぎに例をあげる。

20年ほど前に、テレビの受像管の宣伝に「自動焦点」なる用語が用いられたことがあった。この用語の本来の意味は「自動制御による電子ビームの集中の調節」と考えるべきであるが、実情は受像管のアノードに加わる電圧の変化が焦点を狂わせるのを、電子レンズの電圧に同じものを用いて狂いをキャンセルさせるというもので、上記の用語は不適当と判断された。

つぎはテレビジョンには関係はないが例としてあげると、いわゆる「インバータエヤコン」にも機種によってはこの名称が不適当なものがある。インバータはコンバータ（交流から直流への変換器）の逆で、直流から交流への変換器である。したがって本来の意味でのインバータを用いたものを指すのはよいが、宣伝のためか方式の違うものまでもこのように呼ぶ例があるのは遺憾で、注意しなければならない（用語が不適当なのであってその機種の性能が悪いという意味ではない）。

家庭用VTRのVHS方式と $\beta$ 方式では、以前は同一の概念に属するものを別の呼びかたをしていた。シリンダとドラムがこの例で、これは現在では前者に統一されている。

### (3) 外国語に由来する用語

外国語に由来し、あるいは外国語と同等の意味をもつ用語には、漢字型と片仮名型とが考えられる。例えば signal に対して「信号」と「シグナル」であり、複合語についても同様である。このときつぎの例に示すように一貫性が望まれる。また複合語において漢字型と片仮名型の混用も必要なことがある。

| 英語               | 漢字型用語 | 片仮名型用語           |
|------------------|-------|------------------|
| signal           | 信号    | (シグナル)           |
| signal generator | 信号発生器 | (シグナル<br>ジェネレータ) |

委員会では signal に対しては一貫して漢字型

「信号」を採用しているが、このことが常に可能であるとは限らない。

ワークステーションのように適当な漢字型表記が見出だせないものもある。

また、技術用語では略語の使用が近年ますます多くなっている。例をあげると

- ①AGC (自動利得制御)
- ②AFC (自動周波数制御, 自動忠実度制御)
- ③LD (レーザディスク, レーザダイオード)
- ④LAN
- ⑤NTSC式カラーテレビジョン
- ⑥YC分離

①, ②, ③では ( ) 内の用語があるのでアルファベットのほうは略語とした。ただ②, ③のように複数の用語が対応するものがあるので、注意が必要である。

④については適当な漢字表記はないとして用語として採用した。

⑤のNTSCは米国の the National Television System Committee の略であるが、この表記は用語として定着して久しい。

⑥についてはY, Cはテレビの信号のある部分をあらわす記号として定着しているとして、これを用語として採用した。

#### (4) 現場用語の採用

すでに述べたように、現場用語のうち重要なものは採用した。商品名も重要なものは採用した。

#### (5) 用語のタイプ

制定された用語には次のようなタイプがある。タイプ-1 漢字, 片仮名, 平仮名およびそれらの混用された普通のタイプ。

- (a)後縁同期
- (b)色ぶち
- (c)イオンスポット
- (d)スチルビデオ・フロッピー方式

(注) 文部省の学術用語では「・」は付けない。しかし当委員会では、長い仮名書き用語でそのままでは読みにくいもの(原則として3語以上の複合語)には適当な箇所「・」を入れることになっている(学術用語ではもし必要なら半字幅の空白をとることになっている)。

タイプ-2 アルファベットの文字だけのタイプ。

#### (e)ATF

(注) 適当な漢字または仮名書きの用語がないので、やむをえず用語として採用した。このタイプはなるべく避けたい。

タイプ-3 アルファベットと漢字その他を混用するタイプ。

#### (f)IRE単位

(注) このタイプも避けたほうが良いが、タイプ-2 よりは分かりやすい。

タイプ-4 略語をもつもの。同義語(使ってもよい用語)を持つものも含める。

#### (g)自動音量調整 (\*AVC)

#### (h)利得対雑音比 (\*GT比)

#### (i)CATV (\*ケーブルテレビジョン)

(注) 括弧中の\*印のついた用語は、同義語または略語である。CATVは形式的には略語のタイプであるが、コミュニティアンテナ・テレビと解釈するとケーブルテレビジョンよりは意味がやや広く、こちらを用語として採用した。

#### (6) 意味づけ

意味づけは一般に定義ではなく、ゆるやかに規定し融通性があり拡大解釈のできるものとした。ただし基本的な用語で明確で限定された意味を持ち、定義が定着しているものはこの限りではない。因みにJISの用語は、その目的上、特定の範囲において明確に定義されている。

## 6. むすび

筆者は委員会発足以来委員として、また1984年(S59年)からは主査として技術用語の審査に従ってきた。主査に就任してから、効率よくかつ円滑に審議が行なわれようとして「テレビジョン技術用語審査基準」などを制定した。これに基づいて用語の分類作業を終わり、分野別に用語の見直しや新採用、意味づけの作成、さらに新しい分野の用語の審議などを始めようとした時点で、学会の意向によって委員会は解散となった。その後これに代わるものとして「表示標準化委員会」が作られ、活動を開始している。

以上テレビジョン学会テレビジョン技術用語委員会の活動の経緯を紹介した。「専門用語集の作り方」に関する参考になれば幸いである。



終わりに、歴代の主査である根岸巖、今幡兼六、森本重武の諸氏、委員の方々、および委員会に協力あるいはご助言をいただいた関係諸氏に感謝する。

## [付録]

### テレビジョン技術用語審査基準

テレビジョン技術用語委員会作成  
S61/4/25制定 S63/5/20一部改定

#### 1. テレビジョン技術用語制定の目的

テレビジョンによって代表される放送技術と画像エレクトロニクスに関する技術用語を整理統一し、用語の意味を明確にし、その正しい使用法の基準を与えることを目的とする。

そのためには、この分野を記述する用語を過不足なく選定し、その意味を明らかにし、また社会情勢の変化や科学技術の進歩に従い、新しい概念や新しい技術に対する新しい用語の採用や、新しい意味づけをすることが必要である。また用語として必要でなくなったものは廃止する。

(注) 技術用語：特定の技術分野を記述するために使われる用語。ここでは、テレビジョンによって代表される放送技術と画像エレクトロニクスに関する用語、および上記の分野を記述するための基礎となる共通的な用語を指す。これに対して日常生活で一般に用いられるものが一般用語で、技術用語の審査の対象にはならない。

#### 2. 用語選定の基準

##### (2.1)用語選定の範囲

(1) テレビジョンによって代表される放送技術と画像エレクトロニクスに関する技術用語。教育、技術解説、現場用語、その他必要と思われる用語を加える。

(2) (1)に関係の深い基礎的な用語

(3) 使用範囲の狭い専門用語や商品名のうち特に重要なものは採用する。

(4) 現在使用されていなくても歴史的に重要な意味のある用語は採用する。

##### (2.2)用語審査の基準

原則として学術審議会学術用語分科会「学術用語審査基準」(昭和44年9月9日改正)(以下「学術用語審査基準」という)による。

(1) 概念が適性に表現されている。

(2) 語として適正に構成されている。

(3) 平易簡明である。

(4) 各専門分野の間で統一されている。

(5) 漢字・仮名遣い・送り仮名その他の表記に関しては、内閣告示またはしかるべき基準に従っている。

(6) 耳で聞いて紛れることがない。

(7) 発音しやすく、また聞いて感じがよい。

(8) 一般に広く用いられている用語で、適当と考えられるものは採用する。ただし、極端な略語・略称は採用しない。

(9) 一般の常識で分かりやすい用語。

(10) 用語が各専門分野によって異なっている場合には、その用語が本来所属すると思われる専門分野のものを優先的に扱って、調整することに努める。

(11)文部省「学術用語集電気工学編（増訂版）」（以下学術用語集という）に採用されている用語はこれを尊重する。

### 3. 削除または非選定の基準

- (1)工学の進歩に伴ない、その用語に対応する事物が、技術用語の対象としての価値を失い、さらに概念としても教育研究または運用上使われなくなった用語。
- (2)複合語については、各成分語が選定されていて、しかも概念としても単なる組み合わせで、これを表現する用語も当該複合語の表記以外には考えられず、削除しても混乱を招かない用語。
- (3)現場用語または法令用語で、極端に使用範囲が限定されて一般性がない用語。
- (4)関係学会・協会・業界でほとんど使用されていない用語。
- (5)その他、明らかに不用と考えられる用語。

### 4. 用語の表記法

原則として「学術用語審査基準」・「学術用語集」による。

#### (4.1)表記の原則

(略)

#### (4.2)英語のつづりを仮名書きする場合の原則

(略)

#### (4.3)その他

テレビジョン技術用語委員会の特例

- (1)外来語の表記のうち、ファ、フィ、フェ、ディ、ティについては、特に吟味する。

例：microphon    マイクロホン  
      magnetic    マグネチック  
      field        フィールド

- (2)複合外国語を取り入れた用語で分かりにくいものは、中点「・」を入れる。

#### (3)その他

「テレビジョン」は省略して「テレビ」としてよい。すなわち、テレビ[ジョン]

#### (4.4)補助記号

- (1)省略してもよいもの [     ]

例：スミア [リング]    smear[ing]

- (2)使ってもよいもの (     )

例：微分位相    differential phase (DP)

- (3)説明ないし注記     【     】

例：重合せ【画像】

- (4)参照                             →

例：動集中→ビーム集中

- (5)同義語                             =

### 5. 対応英語およびローマ字

(略)

## 6. 分類

用語は下表によって分類し、分類番号を与える。

---

|        |   |  |
|--------|---|--|
| 基礎     | 基 | 基本用語 (01) 光 (02) 画像 (03) 基本方式 (04)<br>その他 (09)                             |
| 回路・部品  | 部 | 電子デバイス (11) 電子回路 (12) 材料 (13) 部品 (14)<br>その他 (19)                          |
| 送受信    | 信 | 送信 (21) 受信 (22) 局間中継 (23) アンテナ (24)<br>ディスプレイ (25) その他 (29)                |
| 番組制作   | 番 | スタジオ (31) カメラ (32) 音響 (33) 照明 (34)<br>番組中継 (35) 運行 (36) その他 (39)           |
| 記録     | 録 | 溝記録 (41) 磁気記録 (42) 光記録 (43) 写真・映画 (44)<br>印刷 (45) その他 (49)                 |
| 伝送     | 伝 | 無線伝送 (51) 有線伝送 (52) 帯域圧縮 (53)<br>データ伝送 (54) その他 (59)                       |
| 放送方式   | 放 | 多重放送 (61) 文字放送 (62) 光通信 (63) 衛星放送 (64)<br>新放送方式 (65) C A T V (66) その他 (69) |
| 画像情報処理 | 報 | コンピュータグラフィックス (71) リモートセンシング (72)<br>ホログラフィー (73) レーザ (74) その他 (79)        |
| 画像応用   | 応 | 医用 (81) 産業用 (82) 教育用 (83) 理工学応用 (84)<br>レーダ (85) ファックス (86) その他 (89)       |

---

## 7. 意味付け

用語の意味、すなわちそれが表わす概念は明確でなければならない。意味が不明確で混乱を招く恐れのある用語については、意味付けをおこなう。日本工業規格 (J I S)、関係学会、専門用語辞典類などの定義または説明をもってこれに代えてもよい。この場合には出典を明らかにする必要がある。

# 医薬品名辞書ファイルの構築と利用

Development and Uses of the computerized Dictionary  
of the Names for Pharmaceutical Substances

大関 恵子・ OZEKI, Keiko

## 1. 辞書開発の経緯

日本医薬情報センターでは1972年より国内の医学、薬学領域の専門誌から医薬品に関する文献情報を加工し、「日本医薬文献抄録集」として会員に提供してきた。1981年よりデータベース化を行い「JAPICDOC」としてオンラインサービスを開始し現在に至っている。1973年～1993年11月現在までの収録件数は約157,000件、月1回1,200件程のデータ更新を行っている。81年にデータベース化を行う際、検索語となるキーワードの統一を計り、スペルミス等を防ぐために各キーワードテーブル（医薬品名、疾病、副作用、会社名、雑誌名など）を作成した。これは索引者がコードを入力するだけであるキーワードに関する情報がテーブルを介して自動的に付与されるよう設計したものである。図1は医薬品テーブルの一部であるが左側①のコードを付与することにより、このテーブルを介して②～⑨の情報が自動的に付与される。このテーブルを使用してJAPICDOCの索引作業を行ってきた。年々学術雑誌の種類、およびその雑誌に掲載される論文は増加の一途をたどる。対象雑誌239誌と小規模のデータベースながら増え

つづける情報を処理していかななくてはならない。またGPMSP (Good Post Marketing Surveillance Practice: 新医薬品等の再審査の申請のための市販後調査の実施に関する基準) が93年4月より実施されるに当たり、当センターではGPMSPに対応するサービス「医薬文献・学会情報速報サービス」を計画した。これは医学、薬学に関連する約1,200の学会の予稿集、プログラムを収集、情報入手後約2, 3週間でユーザーに医薬品の有効性、安全性に関する情報を提供しようとするものである。この作業を行って行くために各キーワードテーブルをさらに発展させた辞書ファイルの開発、作成が必要になってきた。本稿ではその辞書ファイルの1つ、医薬品名辞書についてその概要を述べる。

医薬品の名称には様々な種類があり、1つの医薬品に化学名、治験名（医薬品として製造許可を得る前に治験段階で使用している仮名称）、商品名、一般名等が文献に記載されている。一口に一般名といっても世界共通の一般名としてWHOにより定められた国際一般名：INN(International Nonproprietary Names)、日本において医薬品名称調査会が定めた一般名：JAN(Japanese Accepted Names)、アメリカのUSAN (United

\* 日本医薬情報センター

| ①コード   | ②記載名                   | ③一般名         | ④薬効  | ⑤会社<br>コード | ⑥会社名 | ⑦会社名 | ⑧構成医薬品名  |
|--------|------------------------|--------------|------|------------|------|------|--|
| ①B0555 | ②B-triple-V<br>therapy | ③            | ④429 | ⑤          | ⑥    | ⑦    | ⑧enocitabine,et<br>oposide,vincrist<br>ine,vinblastine |
| ①B0733 | ②BTS-49465             | ③flosequinan | ④217 | ⑤O003      | ⑥    | ⑦大塚  | ⑧  |
| ①B0217 | ②Bucetalon             | ③            | ④114 | ⑥I007      | ⑦イセイ | ⑧    | ⑨  |
| ①B0218 | ②bucetin               | ③bucetin     | ④114 | ⑥          | ⑦    | ⑧    | ⑨  |
| ①B0605 | ②bucillamine           | ③bucillamine | ④442 | ⑥          | ⑦    | ⑧    | ⑨  |
| ①B0429 | ②bucladesine           | ③bucladesine | ④399 | ⑥          | ⑦    | ⑧    | ⑨  |

図1：医薬品テーブルリスト

States Adopted Names) 等がある。またこれらの名称が付される時期もまちまちである（一般的には化学名、治験名、商品名または一般名の順で名称が変化していく）。これらの名称は英数字、漢字、カナ等の表記方法で記載されているが、JAPICDOCでは、英数字で統一して入力してきた。

従来より JAPICDOC の医薬品名を検索する際のユーザー側の要望として

- ・カナ検索も可能にしてほしい  
(現在は英数字検索のみ)
- ・WHOのINN(国際一般名)以外の一般名からの検索も可能にしてほしい
- ・化学名→治験→商品名の連動を可能にしてほしい
- ・複合剤では成分名からも検索したい等があった。

また索引作業を行う側では、JAPICDOCに加え「医薬文献・学会情報速報サービス」を行うためにはピーク時には2000件/週以上の医薬品名の索引・入力が必要となってくる。従来の1つ1つ医薬品テーブルを調べコードを入力する作業では間に合わない。限られた人数で短時間で索引・入力ができるよう簡略化したいと考えていた。以上のことから作成する辞書の条件として、

- ・あらゆる索引語から辞書にアプローチできること
- ・検索語はユーザーの要望を満たしていること
- ・JAPICDOC用のデータとして使用できること
- ・「医薬文献・学会情報速報サービス」のSDI検索ができること

等、いかにすればこの辞書を使うことによって索引作業が簡単になり、同時に検索にも使用できることを目標として、必要項目の設定を行った。作業は今まで使用してきた「医薬品名テーブル」を母体として、辞書、参考書を調べながら項目の内容を追加していった。

## 2. 辞書ファイルの構成

医薬品名辞書ファイルは表1のように17項目よりなる。各項目それぞれ英名(A)、和名(B)、カナ(C)の項目を設け、英数字、漢字、カナ検

表1：医薬品名辞書項目

|        |                    |
|--------|--------------------|
| <OCD>  | = JAPIC医薬品コード      |
| <01>   | = 商品名              |
| <02>   | = 治験名              |
| <03>   | = 略名               |
| <04>   | = 略名フルネーム          |
| <05>   | = INN (WHO国際一般名)   |
| <06>   | = 化学式・化学名          |
| <07>   | = 慣用名 (INN以外の一般名)  |
| <08>   | = 多剤併用名            |
| <09>   | = 構成医薬品 (合剤, 多剤併用) |
| <10>   | = 合剤に対するINN        |
| <11>   | = 漢方処方・生薬名         |
| <12>   | = 薬効分類コード (81分類)   |
| <13>   | = 薬効分類コード (87分類)   |
| <14>   | = 薬効補足ワード          |
| <15>   | = 会社名              |
| <16>   | = その他              |
| <17>   | = その他の薬理作用名        |
| <ROLX> | = マッチングする項目        |

索に対応できるようにした。

実際の辞書はこの17項目に索引した医薬品名とのマッチング部分<ROLX>A, B, Cと医薬品コードを表す<OCD>がついている。<05>のINNはWHOの国際一般名を示す。<07>にはINN以外の一般的名称が入力されている。<09>は成分名である。複合剤の成分名(例えばST合剤のsulfamethoxazole, trimethoprimなど)、漢方処方の生薬名(例えば葛根湯のカッコン、マオウ、タイソウ・・・など)、抗がん剤の多剤併用療法(JAPICDOC, 医薬文献学会情報速報サービスではこれも医薬品名として扱っている)の構成抗がん剤名(例えばCAF療法のcisplatin, doxorubicin, flurouracilなど)が該当する。

<13>はJAPICDOCでは薬効分類と呼ばれているもので、医薬品の作用名を3ケタの数字で表したものである。日本標準商品分類の医薬品を表わす87の項、87以下3ケタを準用している。<14>、<17>はさらに具体的な作用名を表している。プロトンポンプインヒビター、Kチャンネル開口薬など、まだ<13>の分類には登場しない、よりspecificで新しい作用名および～系などの総称名に対応できるようにこの項目を設けた。<14>はJAPICDOCの薬効補足ワードに対応している。

辞書の項目をそのままJAPICDOCにおける検索語となるように考えたので〈05〉と〈07〉、〈14〉と〈17〉、〈13〉のように本来であれば1つの項目にまとめるべきものをあえて分割しているものもある。このようにJAPICDOCでは医薬品名に関する検索でも薬理作用名、会社名、治験名など様々な角度から検索可能である。

〈図2〉は辞書の一部である。下の部分〈ROLX〉部分が索引した医薬品名とのマッチング部分である。つまり〈ROLX〉部分にある名称をもつ医薬品の情報が〈01〉～〈15〉ということになる。この例は治験名T-1551に関するものでT-1551に対応する商品名〈Cefoperazin : 01〉、一般名〈cefoperazone : 05〉、薬効分類〈613 : 13〉、薬理作用名または総称〈セフェム系抗生物質:14〉、開発会社名〈富山化学 : 15〉が入力されている。

この辞書は通常の辞書と異なり、成分毎にまとめられていない。医薬品は化学名、略名、治験名、商品名など様々な名称を持っている。論文中にも一般名で記載されている場合もあれば商品名で出ているもの、略名のみ記載されている場合など実に様々な形で出てきて統一されていない。すでに登録されている成分名を持つ医薬品でも論文中

| マッチ    |   | T0501          |
|--------|---|----------------|
| 01     | A | Cefoperazin    |
| 01     | B | セフォペラジン        |
| 01     | C | セフォペラジン        |
| 02     | A | T-1551         |
| 05     | A | cefoperazone   |
| 05     | B | セフォペラゾン        |
| 05     | C | セフォペラゾン        |
| OCD    |   | T0501          |
| 12     | 0 | 613            |
| 13     | 0 | 613            |
| 14     | 0 | 908            |
| 14     | A | cephems        |
| 14     | B | セフェム系抗生物質      |
| 14     | C | セフェムケイコウセイブツシツ |
| 15     | 0 | T010           |
| 15     | B | 富山化学           |
| 15     | C | トヤマ            |
| ROL    |   | 02             |
| ROLX A |   | T-1551         |

図2 : 医薬品名辞書

に別の名称が出てくれば新たに辞書に1ファイルとして追加している。また1つの医薬品が1つの薬理作用を持つとは限らない。例えばスルピリドはベンザミド系の精神安定剤であり、一方では抗潰瘍剤としても使用されている。従って〈13〉の薬効分類が117（精神神経用剤を示すコード）のものとは232（抗潰瘍剤を示すコード）の2ファイル登録されている。さらに〈ROLX〉が商品名のもとはスルピリドに関しては少なくとも4つのファイル（カード）があることになる。登録作業が複雑であるがこうすることによってスルピリド全体の検索も、スルピリドを抗潰瘍剤として使用している文献の検索も、さらにアピリットという商品名を持つスルピリドの検索も、言い換えれば網羅的な検索も、的を絞った検索も自在に対応ができる。

現在辞書に登録されている医薬品名の数はのべ約16,000、1カ月に約300の新規登録を行っている。

### 3. 辞書を使用しての索引作業

医薬品名辞書はワークステーション（IBMのOFFICE -X）に搭載され、実際にJAPICDOCおよび「医薬文献・学会情報速報サービス」用の索引に使用されている。図3は「医薬文献・学会情報速報サービス」に対応したデータベース構築サブシステムの全体を表している。図4は医薬品名辞書を使用した索引システムの概要図である。採択された論文は全文イメージ入力後、OCR（Optical Character Reader）でテキスト変換される。別に論文から医薬品名をパソコンで入力しワークステーションにとり込む。この医薬品名と辞書のマッチングを行う。

辞書中の〈ROLX〉部分の医薬品名A〈英名〉、B〈和名〉、C〈カナ〉いずれか1つでも一致すると一致した〈ROLX〉を持つファイルの医薬品コード〈OCD〉がすでにOCR入力されている文献に付加される。一致する医薬品名が複数ある場合は画面上で該当する医薬品名を選択する（図5参照）。この時点では〈01〉～〈17〉までの情報は付加されない。入力した医薬品名が辞書中にない場合はアンマッチリストとして出力される。こ

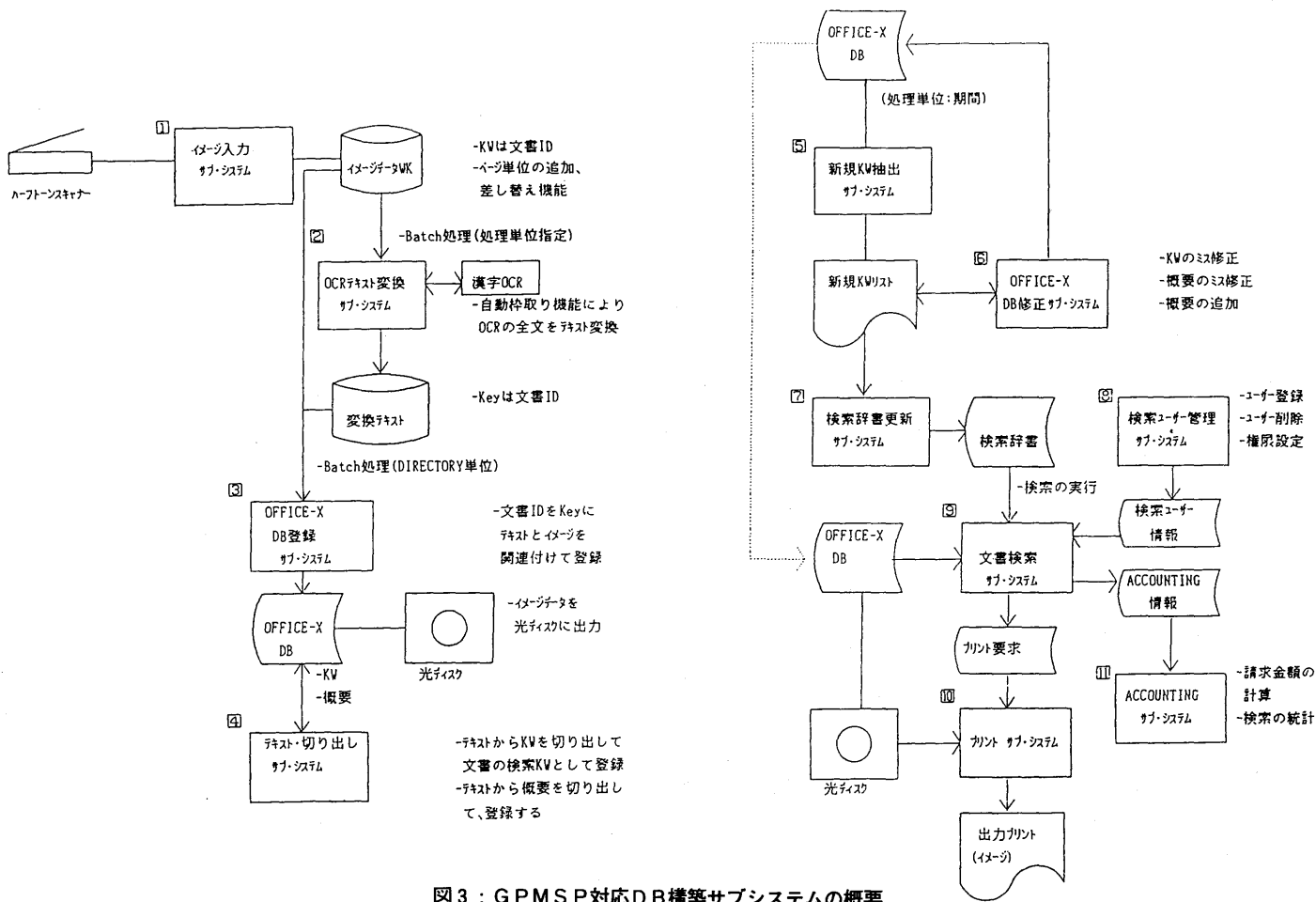


図3：GPMSP対応DB構築サブシステムの概要

の場合は全く新しい医薬品名の場合と単純なスペルミスの2つが考えられるのでミスは訂正，新医薬品名は辞書に登録する。

#### 4. 辞書を介しての検索

〈01〉～〈17〉すべての項目が検索項目となっている。検索対象の医薬品名が入力されると辞書上の〈01〉～〈17〉すべてを見に行く。検索対象の医薬品名が〈01〉～〈17〉のどこかにあった場合はそのファイルの〈OCD〉が付加される。この〈OCD〉と第3章 索引作業の項で述べた〈OCD〉が一致した場合に該当する文献の書誌・抄録が出力される。辞書を介しての検索は現在「医薬

文献・学会情報速報サービス」のSDI検索に実際に使用されている。例えばベタメサゾン外用剤についての文献を検索する場合は、〈05A〉betamethasone（または〈05B〉，〈05C〉ベタメサゾン）と〈130〉264（264は外用副腎皮質ホルモン剤を示す薬効である）のAND検索となる。また抗がん剤ドキシソルビシンの網羅検索は〈05A〉doxorubicin（または〈05B〉，〈05C〉ドキシソルビシン）と〈09A〉doxorubicin（または〈09B〉，〈09C〉ドキシソルビシン）のOR検索となる。〈09〉は抗がん剤併用療法の構成医薬品名が入力されているのでドキシソルビシン単剤でできた文献も，多剤併用療法の1成分としてできた文献も両方

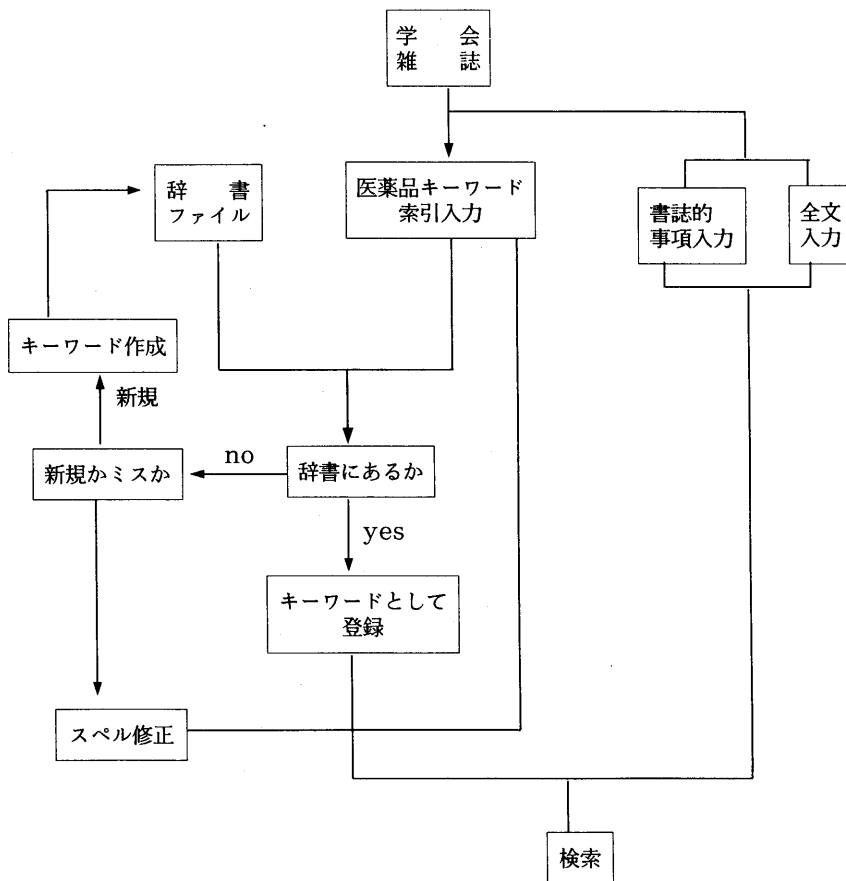


図4：医薬品名辞書を使用した索引システム



DATE /22/09/93  
 TIME 18:33:25  
 /home/office/K/ML/res  
 japic01[office]1\*

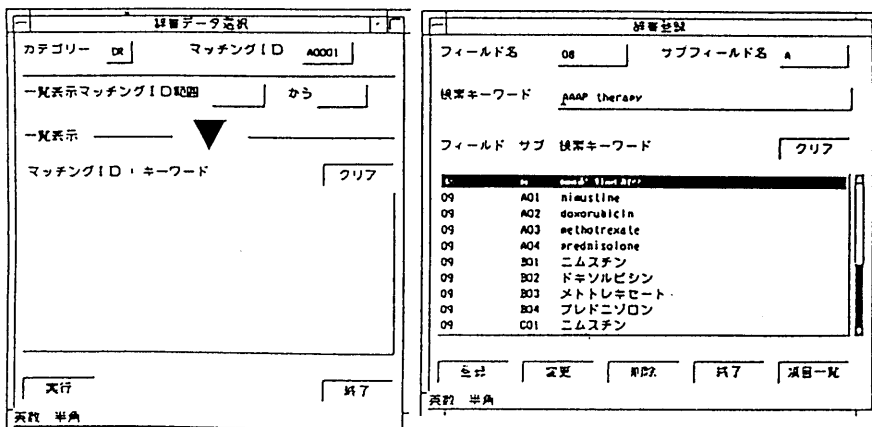


図5：ワークステーション上の画面

検索してくる。このように網羅的に検索を行うか、使用目的を絞った検索にするかはユーザーの希望を聞いて行っている。

### 5. 今後の課題

文献上では医薬品名は実に様々な形で出てくる。どのような形で出てきても辞書とのマッチングが可能であるし辞書中に該当する医薬品名があるかどうか短時間に機械が判断してくれる。またある医薬品に関する情報（商品名に対する一般名など）を正確に均一に付加することができる。ただ辞書はまだ完全に完成されたものとは言い難い状態である。1つの医薬品に関して〈01〉～〈17〉までの内容がすべて入っている訳ではないので今後、特に化学名、略名などの追加を逐次行っていく予定である。将来的には構造式の入力も考えている。また使用目的によって狭い検索も、広い検索も可能であるということは、裏をかえせば辞書登録作業が繁雑ということになっている。さらに辞書とのマッチングが現在は完全一致のみなのでアンマッ

チリストの出力が多く、まだ未解決の部分が多い。将来的にはあいまい検索を可能にするなどソフト面での充実を計ることが必要だと考える。情報検索の精度をあげるためには辞書機能の充実と絶えざる維持が必要である。特に医薬品のデータベースでは、基本的な機能といってもよいかもしれない。やがて同種データベース、例えば地域医療機関内や企業の内部データベースなどにも役立てていただく時がくれば幸いである。

この一文を書くに際し、多くの方々のお助言、御助力をいただいた。厚く謝意を表したい。

### 参考文献

長山泰介ほか. 漢字データベースとなったJAPIC DOCシステム. 情報管理. 27(2),131-141(1984)

# T K E ' 9 3 ターミロジーと 知識工学会議 ' 9 3

1993年8月25日-27日

ドイツ ケルン

藤原 譲\*1  
門條 司\*2  
平井 歩実\*3  
仲本秀四郎\*\*4

## 会議の印象

3年に1回開催されるT K E (Terminology and Knowledge Engineering)は第1回1987年と第2回1990年がトリヤー、今回は第3回目でドイツのケルン市で催された。

ターミロジーの研究や、応用の必要性を訴えることから始められたといえるこの会議も、3回目を迎えて方向が少し明確になってきた感じである。

発表された論文はこの分野の専門家の活動を反映して、1)用語の基礎研究、2)機械翻訳、3)ドクメンテーション作成、4)知識獲得、5)標準化その他 の五つの方向に大別される。それぞれの項目については続く報告に任せるとして、かんとんに印象を述べると、第一項目の基礎研究は始めから重要であると思われていたが、当初の人文科学的アプローチが主流であったのに対して、システム化の観点からモデル化を検討することに大きく変わってきたとともに、発表の数も多くなっている。とくに筆者の注意を惹いたのは、ドイツGMDのD. FischerのDual Modelであった。これは概念そのものの表現のみならず、概念間の

関係を表現することが必要であることにかかわる問題である。よく知られているようにE-R(実体-関係)モデルは、その点で直接利用できるモデルであるが、実体と関係をそれぞれ固定的に扱うので、関係を実体として扱いたい場合、またはその逆の場合に対応できないという基本的な課題があった。Fischerはハイパーテキストにおけるリンクに、必要な情報を付加するfat linkで対処する方法を発表していた。たまたま筆者の発表はFischerの報告の時間と重なっていたため、後で議論したのでかえって要点をよく理解できた。ただ彼の方式は情報の入力点では問題はないが、理論的には関係の相対性を吸収できる双対性を扱う方式ではなく、概念と関係の分離が固定したままなので、管理および利用の面での問題が未解決である。この他にもモデルまたはモデル化に含む論文は、筆者の気のついた範囲で6論文もあった。

第2項目の翻訳と第3項目のドクメンテーション作成は、前者が国際化が進み、特にEC統合が現実になった昨今では必要性が高く、後者は会議の主催者の一人で、日本でもよく知られているGalinski氏の熱意もあってそれぞれ活動が定着している感じである。

第4項目の知識獲得は、シソーラスの自動構築や概念構造の基本課題とも関連していて関心を集めていた。内容は編集機能型とハイパーテキストオブジェクト指向DBの応用型に分けられるが、ほとんど始まったばかりで、自己組織化のような自動化を取り上げたのがなく、初歩的な段階の感じである。

また、標準化、セキュリティ、知的所有権などにも関係したものもあり、用語活動の広さを示しているともいえる。

なお参加者は日本からIRISの仲本秀四郎、九大名誉教授の吉田将、三洋ソフトウェアサービスの門條司、福岡県立大の平井歩実の4氏と筑波大からの小生を含め計5人であった。全体で180人で、大きくはないけれども充実した会議であった。(藤原)

\*1 筑波大学

\*2 三洋ソフトウェアサービス

\*3 福岡県立大学

\*4 IRIS

発表のいくつか

Gert Engel

Unambiguity and ambiguity  
distributed print at meeting

基調講演の一つである。ターミノロジーは未だに新しい科学であるか？ 目標を達成したことがあるか？ 限界がすでに見えているか？ の問に始まる。100年前のデンマークの言語学者のユトランド地方旅行中のターミノロジー体験、すなわち、職人がものごとに名前をつけることがすでに現代のターミノロジー感覚にとって古いものであり、ターミノロジストは蒐集家ではないと説く。言語体系に限られた意味論にあるに対し、語は無数の組み合わせを持ち、語形成は当初単純であった。だが、あるレベルに達したとき、人間の頭脳は外部に情報の蓄積を必要とするようになった。前世紀後半からの急激な知識の展開が言語開発の限界を明らかにするようになり、自然的な言語学に対し、ターミノロジーは反自然でなく、自然を倣って、すなわち人工的な言語体系を創るようになった。ISO規格がその例である。

それも限界がまたあり、デジタル化すなわち電算機がその打開を可能にした。バベルは現在、多言語コミュニケーション問題の本質ないしシンボルを意味しており、最初のターミノロジーバンクはターミノロジー目的でなく、翻訳目的であった。しかし、そこでは等意性 (equivalence) が言語間の大きな課題であった。1言語内での非曖昧性は定義のターミノロジー原則を貫けば理論的に可能とみなされていた。しかし、新概念の増加は急速で、ターミノロジー作業は追いつかず、停滞の状況にある。その解決として、かれは、技術ドキュメンテーションの再評価、機械翻訳での非曖昧性、限定した領域での認知科学での記号言語計画、マルチメディアコミュニケーションでの非曖昧性の努力を挙げた。機械翻訳については「辞書を与え給え」と呼び、非曖昧性を可能にするマルチメディアコミュニケーションでは「言語筆記体系の独占は既に破れた」と宣言した。

非曖昧性の追求がターミノロジーの目的であり、ホモファーバー (工作人) としてのターミノロジストに課せられていることの重要性を強調した。

Erich Schweighofer, Werner Winiwarter,  
University of Vienna, Austria

Refining the selectivity of thesauri by means  
of statistical analysis

TKE'93: Terminology and knowledge engineering, p.105-114

言語は法律家の中心的課題であり、法律的思想は法律用語に基づいていると切り出し、法律用語は自然語より精細であるとのテスト結果を披露した。動機として、法律概念が多くの自然語で表現されているが、法律データベースのブル検索で、しばしば概念を特定できないことにあと述べた。意味の知識表現利用や意味ネットワーク、ベクトル空間モデルなどの他の研究を参照して、知的検索システムであるKONTERMを構築、法律文の自動インデキシングのための選択的シソーラス作成を紹介した。ベクトルで法律概念の意味を表現し、デスクリプタの前後50語中の文脈から計算している。解析方法としてはモジュラー工程を手順に、最初の対象としてECの法律データベースCELEX、次いでオーストリア条約データベースを使用、KONTERMがデスクリプター間の差や、意味ファジーの区別ができた結果を報告した。

Uwe Reinke, Universitaet des Saarlandes,  
Germany

Towards a standard interchange format for  
terminographic data

TKE'93: Terminology and knowledge engineering, p.270-282

まず、ターミノロジーデータ交換での困難を四つに分ける。一つが資金や著作権などの経済的法的諸問題、次にハード・ソフトにおける技術の共通規格の不在、そして、電算機支援のターミノロジー研究と実際との分離、最後に交換当事者間のデータカテゴリーの違いである。

ISO 646に含まれない非ローマン文字セットについて、開発中のISO DIS 10646に言及する。次いで、ソフトウェアにおいて入力構造の異なる点に触れ、固定長・可変長の問題ばかりでなく、自由に定義できる構造の方が変換プログラムにおいてより努力を必要とすると述べている。データ

カテゴリーについては、重複・曖昧・相互関係・繰り返しを論ずる。そして、交換規格の開発での基本的要求として、特定の学派の方法論によらないこと、一意的にデータカテゴリーを定める、固定した名称を与える、異なる要求に対して調整を許す、非ローマン文字を表現できる可能性などを挙げた。

経緯として、ターミノロジーフォーマットとして制定された ISO 6156 MATER が磁気テープを唱えたので、できたときすでにメディアとして古くなっていくこと、メインフレームの適用を想定していたため、ほとんど使用されなかったと述べた。PC環境への適応として MicroMATER や北欧諸国での NTRF の開発に触れ、最近の努力として、SGMLをターミノロジーデータ交換に適用しようとする動きを論評した。この SGML 準拠の交換フォーマットについて、かれは有望あると期待を表明しているが、一方、これら標準化が入力質の向上には影響なく、ターミノロジー研修への重要性を低く見ないよう指摘した。

Hans-Juergen Stellbrink, STELBRINK Intercommunication, Essen, Germany

Selling terminology at a price - The wrong approach

TKE'93:Terminology and knowledge engineering, p.292-299

現代の情報通信時代では、知識はフィクションになったと、おもしろいことをいう。どんな大きなデータベースでもすべての情報を収容できないし、どの人も自分の分野の情報でさえ扱えないし、自国語もよく理解されず、文献は広く読まれてないという。ターミノロジーなくしてコミュニケーションはできず、進歩も記録できない。標準化ターミノロジーはソフトパッケージでも通信パッケージでも重要である。しかし、輸出奨励と輸入抑制を考慮した文化遺産の理由から、外国のターミノロジーには政治の要素が加わってくる。

現在、ターミノロジーの作成コストは5 DMから15 DMの間にある。ターミノロジーの利益は間接的だし、ターミノロジーバンクによる翻訳改善の程度を測ることは困難である。ある機関は無

料で提供して、ターミノロジーを確保しようとし、他の機関はコストより安い値段でプリントアウトやディスクのコストを償却しようとしている。また、他の機関は最高値をつけてターミノロジーの商人になっている。

ターミノロジーが教育に果たした貢献は計算できないし、標準化によるコストの軽減は莫大のほうである。そんな中で、ターミノロジーに値段をつけて売る商業アプローチは脅威である。支払を嫌って別にターミノロジーを作成しようとして重複を招くだろうし、標準化の道を閉ざすことにもなる。無料なら翻訳のコスト削減は可能である。

そのためにも、ターミノロジーの交換は無料であるべきである。交換のための国際センターを樹立し、国際通信ネットワークでオンラインアクセスできるように国際データベースを構築する。その初期コストはISOのような機関が負担し、フィージビリティスタディを行えば、標準化のコストを下げ急速に資金を償却するのがわかるだろうと述べた。その主唱をINFOTERMが果たすよう期待を表明した。

S. Ball (European Parliament (EP), Luxembourg) The European Parliament's Euterpe Database: An Introduction

TKE'93:Terminology and knowledge engineering, p.308-315

ヨーロッパ議会(EP)における、EUTERPE databaseの使用経験に関する報告である。EPでは、1992年までにターミノロジーに関する全ての仕事をコンピュータ化しており、また、翻訳者のおよそ三分の一にはほぼ同時期にPCが与えられ、1993-4年にはもっと多くの人が利用できるようになる予定である。EUTERPE databaseは、Olivettiのミニ・コンピュータLSX 5030 (RAM: 32megabytes, Hard Disk: 2.2gigabytes 装備)上に搭載した、Trados GmbH製のMultiTerm 2.5 データベース管理システムを使って構築されており、LANを経由してアクセスできるようになっている。翻訳者が使う標準的なPCの構成は、DOS 5、Word Perfect 5.1、MultiTerm それ

にEPネットワーク経由の外部データベースへのアクセスツールである。現在、毎日30-50人の翻訳者がEUTERPを利用しており、またこのデータベースを使ったターミノロジーに関する分析プロジェクトなども活動している。今後の課題は、これらDOSベースで作られているものを、Windows環境に移植することとこのことである。

D. H. Fischer (GMD-IPSI, Darmstat, Germany)  
Consistency Rules and Triggers for Multilingual Terminology  
TKE'93: Terminology and knowledge engineering, p.333-342

二言語ターミノロジーの語彙モデルとしてシソーラス・モデルを開発する際に適用できる、選択的な知識の表現法に関するの報告で、(1)実体と関係の"デュアル"モデル、(2)概念の命名と同形異義語の統制に関する原則、(3)階層構造と結合関係の意味論、(4)一種の構造保存型のマッピングとしての翻訳と多言語性、に関する話題に焦点を当てたものである。著者等は、それまでのモデリング実験によって得られていた経験などを、包含関係のモデルをもっと容易に扱うことのできる、"ipsiLex"と命名された、二言語ターミノロジー保守用のプロトタイプ・システムへと移植し、前述の分野を中心により突っ込んだ実験を行ったのである。この ipsiLex モデルに使った実装ツールは、ハイパーテキスト式に発想を表現し更新できるものである。現在、著者等は、この ipsiLex に関する経験とツールをもとに、より複雑なモデルである百科事典用のプロトタイプ・システム作成活動に、既に着手しているとのことである。

P. Losco, H. Chelyah, M. Mlouka (I.N.R.I.A. Sophia Antipolis, France)  
GELEM, a Multilingual Lexicons Management System  
TKE'93: Terminology and knowledge engineering, p.354-362

多言語語彙管理システムGELEMで使用している辞書データなどの、データ構造に関する報告である。このGELEMは、大きく分けると、7種類

の処理モジュールと、それらが使う4種類の辞書及び変換テーブルから構成されている。ここで用いている"morphological dictionaries"の構造は、インド・ヨーロッパ言語族、セム言語族(アラビア語やヘブライ語など)、表意文字を使う言語族(中国語や日本語など)用に、タイプの異なるものを用意しようというものである。その他、"grammar-lexicons"や"pragmatic dictionaries"の構造に関しても簡単に報告されている。このGELEMを稼働させるにあたっては、多言語語彙操作のソフトウェアに関するMALINプロジェクトでなされた別の仕事の成果(言語操作のユーザ・インタフェース)を利用したとのことであり、また、現状のシステムでは、3つのタイプの言語族しか考慮していないが、将来は、いかなる自然言語も取り扱えるように、それら以外の言語の取り扱いについての研究も行われているとのことである。

C. Quist (Copenhagen Business School, Denmark)

Knowledge Management in the Field of Terminology:

Development of a PC Application Program  
TKE'93: Terminology and knowledge engineering, p.375-383

特定の分野で仕事を進めようとするターミノジストに、概念分析のような初期段階の仕事から用語のプレゼンテーションのような最終段階の仕事に至るまで、その全般に渡る仕事の支援する、標準的なPCで動作可能な応用プログラムの開発についての報告である。コンピュータ上で概念体系を取り扱う方法を検討した結果、実験的なプログラムとして、概念体系は外延的な知識を基本として構築し、さらに必要に応じて、ターミノロジーの基本原則に沿って概念の内包が形作られているかどうかをチェックすることにより、利用者の概念分析を手助けできるようなものを考案した。このプログラムは、エキスパート・システムの構造を参考にしており、Prolog で書かれていて、入力データを、"concept-related"データと"Term-related"データの2グループに分類する。

現在は、著者の学校の学生用のバージョンが稼働している。

### 知識工学

藤原教授の紹介にもあるように、1,000名を数えた第1回に比して、参加者が急激に減少したのは、実は会議の性格が明瞭になってきたことにある。機械翻訳に刺激されて第1回に集まってきた翻訳者は大部分がターミノロジーの利用者で、研究的色彩の強いこの会議には向かず、会議がこの規模になるのは当然といえた。ただ、気になったのは前回(1990)と発表内容にそれほどの進展が見えないように思えたことである。もともとそんなに早く進展できる領域ではないから、3年程度で目ざましい発展を期待する方が欲張りといえるだろう。自分が発表しないのに、こんなことをいうのは気がひけるが、日本からの発表が藤原先生だけというのは淋しいというよりほかない。

“知識工学”(knowledge engineering)というのと、“知能工学”と同じように思う人が多い。働きを司る電算機の利用なら、扱うものは機能すなわち“知能”であって、“知識”ではない。しかし、人工知能(artificial intelligence)が対象とするデータは、情報か知識のほずである。その知識の整理に、電算機利用の工学的手法を駆使して、体系化を図ろうとする分野を“知識工学”という。ところで、知識は概念の体系であるから、知識は術語(学術用語・技術用語・芸術用語など)で表現される。その術語を研究実施する世界がターミノロジーにほかならない。だから、主眼は概念にあるが、整理の上、語を付与するから言語学の素養も必要とされている。

“ターム”の翻訳には“術語”を使いたいし、現に中国では“術語”を用いている。しかし、“術語”と“述語”は同音異義語であって、その使用はターミノロジーの世界でもっとも避けたいことがらなのである。この会の名称に“専門用語”とつけた苦勞を思いながら、知識工学への解説を試み、ケルン会議の報告を提供する。

(仲本)

## 国内刊行専門用語辞典リスト(1992)

### 凡例

#### 1 収録範囲

1992年に国内で出版された専門用語辞典(集)171点を収録した。国語辞典, 新語辞典, 古語辞典, 方言辞典等は収録対象としていない。

#### 2 情報源

JAPAN/MARC

#### 3 書誌記述

SIST 02-1984: 参考文献の書き方に準拠した。

記述項目は, 著者名, 書名, 版表示, 出版事項, 出版地, 出版者, 出版年, 資料のページ数, シリーズ記述, 国際標準図書番号 (ISBN) とした。

#### 4 排列

日本十進分類法 (NDC) 第8版に従って分類順に排列した。

分類見出しに続く用語は国立国会図書館件名標目 (NDLSH) である。

#### 5 例示

分類見出し 件名

497 歯科学

著者 ↓ 書名 ↓ 版表示 ↓  
◎日本歯科大学「歯科用語集」編集委員会編. 標準歯科用語集: 和・英・独・ラ. 4版.  
東京, 医歯薬出版, 1992.11. 901p. (ISBN 4263401727)  
↑ 出版地 ↑ 出版者 ↑ 出版年 ↑ ページ数 ↑ ISBN ↑

#### 6 その他

このリストについてのご意見やお問い合わせは編集委員・加藤までお寄せください。

## 007 情報処理

- ◎情報処理用語大事典編集委員会編. 情報処理用語大事典.  
東京, オーム社, 1992.11. 1305p. (ISBN 427407742X)
- ◎日経BP社編. 情報・通信新語辞典: コンピュータ・通信の最新知識. 1992年版.  
東京, 日経BP社, 1992.2. 318p. (ISBN 4822271374)
- ◎水原邦保ほか共著. オンライン重要用語事典: 情報処理技術者試験.  
東京, オーム社, 1992.8. 142p. (ISBN 4274161668)

## 100 哲学

- ◎里見軍之, 飛田就一編. 哲学基本事典: 哲学入門.  
東京, 富士書店, 1992.4. 265p.

## 146 精神分析

- ◎チャールズ・ライクロフト著; 山口泰司訳. 精神分析学辞典.  
東京, 河出書房新社, 1992.5. 254p. (ISBN 430923027X)

## 180 仏教

- ◎斎藤昭俊著. 仏教語ものしり事典.  
東京, 新人物往来社, 1992.5. 220p. (宗教とくらし選書) (ISBN 4404019114)

## 188.7 真宗

- ◎浄土真宗本願寺派高岡教区基幹運動推進委員会編. 聞法ハンドブック: 真宗用語のいろは.  
京都, 永田文昌堂, 1992.5. 63p.

## 210 日本 -- 歴史

- ◎国史大辞典編集委員会編. 国史大辞典. 第13巻 ま～も.  
東京, 吉川弘文館, 1992.4.952p. (ISBN 4642005137)

## 210.2 考古学

- ◎斎藤忠著. 日本考古学用語辞典.  
東京, 学生社, 1992.5. 568p. (ISBN 4311750196)

## 210.6 日本 -- 歴史 -- 明治以後

- ◎安岡昭男編. 近現代史用語事典.  
東京, 新人物往来社, 1992.9. 411p. (ISBN 4404019327)

## 290 地理学

- ◎地理用語集. 東京, 山川出版社, 1992.3. 316p. (ISBN 4634054701)

## 303 社会科学

- ◎社会科学辞典編集委員会編. 社会科学総合辞典.  
東京, 新日本出版社, 1992.7. 810p. (ISBN 4406020950)



### 312.38 ロシア -- 政治

- ◎稲子恒夫著. 政治法律ロシア語辞典.  
東京, ナウカ, 1992.2. 548p. (ISBN 4888460272)

### 318 地方行政

- ◎県政用語集. 平成4年.  
福島, 福島県議会事務局, 1992.2. 425p.

### 322.953 法律 -- アメリカ合衆国

- ◎長谷川俊明著;東京布井出版編集部編. 法律英語ミニ辞典: ミニ・ローダス英和.  
東京, 東京布井出版, 1992.5. 322p. (ISBN 4810910865)

### 323 法律

- ◎図解による法律用語辞典: 学習に実務に法律の世界を踏査する人の必携書. 1992最新版.  
東京, 自由国民社, 1992.9. 1167p. (ISBN 4426401089)

### 324 民法

- ◎玉田弘毅編. 民法小辞典.  
東京, 住宅新報社, 1992.1. 363p. (ISBN 4789214672)

### 324.12 公益法人

- ◎公益法人協会編. 公益法人用語辞典.  
東京, 公益法人協会, 1992.10. 290p. (ISBN 4906173152)

### 326 刑事法

- ◎中山研一編. 刑事法小辞典.  
東京, 成文堂, 1992.10. 309p. (ISBN 4792312965)

### 326.53 矯正保護

- ◎和英矯正用語活用辞典編集委員会編. 和英矯正用語辞典.  
東京, 矯正協会, 1992.7. 299p.

### 327.13 検察

- ◎検察実務用語解説.  
東京, 法務総合研究所, 1992.3. 125p. (研修教材)

### 330 経済

- ◎大阪市立大学経済研究所編. 経済学辞典. 第3版.  
東京, 岩波書店, 1992.3. 1500p. (ISBN 4000800760)
- ◎杉沢理. アラビア語商業経済用語集: 日本語・英語・カナ表記つき.  
東京, 南雲堂フェニックス, 1992.4. 160p. (ISBN 4523815305)
- ◎日本経済新聞社編. 経済新語辞典. 1993年版.  
東京, 日本経済新聞社, 1992.9. 529p. (ISBN 4532215021)
- ◎PHP研究所編. ビジネス・キーワードハンドブック: 政治・経済から科学・テクノロジーまで  
必須746ワード. 1992年版.  
東京, PHP研究所, 1992.4. 181p. (ISBN 4569535925)

### 335 経営

- ◎工藤秀幸編. 経営用語辞典. 21版.  
東京, 日本経済新聞社, 1992.7. 206p.(日経文庫) (ISBN 4532010667)
- ◎柴川林也編. 経営用語辞典. 第3版.  
東京, 東洋経済新報社, 1992.6. 316p.(ISBN 4492010483)
- ◎日本経営士会編. 実務経営用語2000.  
東京, 経林書房, 1992.2. 640p.

### 336 経営

- ◎斎藤弘行著. 経営組織・人間小辞典.  
東京, 同友館, 1992.7. 207p.(ISBN 4496018942)
- ◎新ビジネス18万語大辞典: インタープレス版. 英和編. 増補改訂版.  
東京, アイピーシー, 1992.9.1143,113p. (ISBN 4871982262)
- ◎新ビジネス18万語大辞典: インタープレス版. 和英編. 増補改訂版.  
東京, アイピーシー, 1992.9.1171,104p. (ISBN 4871982270)

#### 336.4 人事管理

- ◎島袋嘉昌編著. 労務管理小辞典.  
東京, 中央経済社, 1992.11. 322p. (ISBN 4502319163)
- ◎日経連経済調査部編. 人事・労務用語辞典. 新版.  
東京, 日本経営者団体連盟弘報部, 1992.12. 371p. (ISBN 4818592137)

#### 336.8 管理会計, 財務管理

- ◎大野敏男責任編集. 財務用語辞典. 3訂.  
東京, 経済法令研究会, 1992.3. 564p. (ISBN 4766812247)
- ◎諸井勝之助, 後藤幸男編著. 東財務・金融小辞典.  
東京, 中央経済社, 1992.5. 366p.(ISBN 4502316962)

#### 336.9 会計学

- ◎日本経済新聞社編. 会計用語辞典. 4版.  
東京, 日本経済新聞社, 1992.3. 192p.(日経文庫) (ISBN 4532012600)
- ◎森田哲弥, 宮本匡章編著. 会計学辞典. 第2版.  
東京, 中央経済社, 1992.2. 488p.(ISBN 4502100803)

#### 336.98 税務会計

- ◎村井博美編. 税務・会計用語辞典: 和英用語対照. 6訂版.  
東京, 財経詳報社, 1992.3. (ISBN 4881771140)

### 338 金融

- ◎アイ・エス・エス編. 英和和英金融用語辞典.  
東京, Wave出版, 1992.8. 361p.(ISBN 4900528145)
- ◎武田昌輔ほか責任編集. 金融証券用語辞典. 3訂.  
東京, 銀行研修社, 1992.5. 701p.(ISBN 4765726738)
- ◎津田和夫ほか責任編集. 金融・経済用語辞典. 改訂.  
東京, 経済法令研究会, 1992.4.487p. (銀行実務用語シリーズ) (ISBN 4766812255)

### 338.5 銀行実務

- ◎鈴木正和, 松本崇責任編集. 法務用語辞典. 改訂.  
東京, 経済法令研究会, 1992.7.700p.(銀行実務用語シリーズ) (ISBN 4766802217)

### 338.8 信託

- ◎信託協会編. 信託実務用語辞典.  
東京, 金融財政事情研究会, 1992.11. 289p. (ISBN 4322209912)

### 339 保険

- ◎東京海上火災保険株式会社, 明治生命保険相互会社編. 保険用語辞典. 第2版.  
東京, 東洋経済新報社, 1992.9. 222p. (ISBN 4492010491)

### 339.43 保険医学

- ◎日本保険医学会編. 保険医学用語集. 第2版.  
東京, 日本保険医学会, 1992.3. 108p.(ISBN 4990016025)

### 345.1 租税法

- ◎金子宏編著. 税法用語事典. 補訂版.  
東京, 税務経理協会, 1992.8. 516p.(ISBN 4419018100)  
◎福富嘉彦編. 税法用語辞典. 平成4年全面改訂版.  
東京, 大蔵財務協会, 1992.8. 596p.

### 350 統計

- ◎Stat group編著. 世界の動きをよむ英語統計用語集.  
東京, 語学春秋社, 1992.7.367p. (ISBN 487568262X)

### 361 社会学

- ◎天野正子ほか編. 社会学用語辞典. 全訂版.  
東京, 学文社, 1992.6. 385p.(ISBN 4762004367)

### 366 労働問題

- ◎労働大臣官房国際労働課編. 最新和英労働用語辞典.  
東京, 日刊労働通信社, 1992.3. 131,44p.

### 369 社会福祉

- ◎社会福祉用語辞典.  
東京, 中央法規出版, 1992.4. 675p. (ISBN 4805809736)

### 370 教育学

- ◎岩内亮一ほか編著. 新版教育学用語辞典.  
東京, 学文社, 1992.4. 307p. (ISBN 4762004200)  
◎下村哲夫編. すぐに役立つ教職教養用語事典. 1994年度版.  
東京, 一ツ橋書店, 1992.10. 250p. (ISBN 4565941732)

#### 430 化学

- ◎化学用語辞典編集委員会編. 化学用語辞典. 第3版.  
東京, 技報堂出版, 1992.5.1059p. (ISBN 4765500225)

#### 463 細胞学

- ◎細胞生物学辞典編集委員会編. 細胞生物学辞典.  
東京, 中外医学社, 1992.11. 364p. (ISBN 4498009320)

#### 464 生化学

- ◎J.Stenesh著 ; 中村運訳・編. 分子生物学辞典.  
京都, 化学同人, 1992.5. 798p.

#### 490 医学

- ◎稲福盛輝編著. 医学冲縄語辞典.  
宜野湾, ロマン書房本店, 1992.7. 268p.  
◎坂巻寿ほか編著. 医学重要用語ガイド.  
東京, 中外医学社, 1992.7. 241p.(ISBN 4498009282)  
◎ステッドマン医学大辞典編集委員会編訳. ステッドマン医学大辞典 : 和英索引付. 改訂第3版.  
東京, メジカルビュー社, 1992.5. 1冊. (ISBN 4895531716)  
◎戸苅創, 今西春彦編. 臨床英略語ディクショナリー.  
吹田, メディカ出版, 1992.6. 264p.(ISBN 4895731960)

#### 490.7 看護学

- ◎常葉恵子ほか編. 看護英和辞典.  
東京, 医学書院, 1992.3. 1335p. (ISBN 4260340506)

#### 492.29 救急療法

- ◎W.A.Gunn著 ; 青野允ほか監訳. 災害医学用語事典 : 和・英・仏・西語.  
東京, へるす出版, 1992.9. 109p. (ISBN 489269181X)

#### 493.89 結核

- ◎日本結核病学会用語委員会編. 結核用語事典.  
東京, 結核予防会, 1992.4. 250p. (ISBN 4874511287)

#### 497 歯科学

- ◎Jenifer E.H.Fairpo, C.Gavin Fairpo編集 ; 有坂利通訳. ハイネマン歯科英和辞典.  
東京, 医歯薬出版, 1992.11. 528p. (ISBN 4263403886)  
◎日本歯科大学「歯科用語集」編集委員会編. 標準歯科用語集 : 和・英・独・ラ. 第4版.  
東京, 医歯薬出版, 1992.11. 901p. (ISBN 4263401727)  
◎文部省, 日本歯科医学会著. 学術用語集 : 歯学編. 増訂版.  
東京, 日本歯科医学会, 1992.11. 1005p. (ISBN 4896050851)

#### 498 医療

- ◎病院OJT研究会編. 実用最新病院用語の基礎知識.  
東京, 日本医療企画, 1992.4.223p. (ISBN 4890411747)

#### 498.7 母子保護

◎新・母子保健用語集.

東京, 同文書院, 1992.10. 199p. (ISBN 4810300218)

#### 499 薬学

◎日本医薬品卸業連合会広報部編. 医薬用語事典. 第4版.

東京, 薬業時報社, 1992.3. 268p. (ISBN 4840717192)

#### 499.8 生薬学

◎生薬漢名学名対照辞典. 1992年版.

東京, 科学書院, 1992.4. 262p.

#### 501.48 ダイヤモンド(工業用)

◎ダイヤモンド工業協会編. 図解工業用ダイヤモンド用語辞典.

東京, 日刊工業新聞社, 1992.11. 273, 31p. (ISBN 4526032328)

#### 503 科学技術

◎多分野共通・多言語表示科学技術基本用語集.

平塚, 神奈川大学知識情報研究所, 1992.3. 233p.

#### 509.6 生産管理

◎井上寿雄, 谷口正成共著. CIM・FA&ロジスティクス用語事典.

東京, オーム社, 1992.9. 455p. (ISBN 4274086364)

#### 510 土木工学

◎国土用語広報研究会編著. 国土用語辞典. 改訂.

東京, きょうせい, 1992.3. 390p. (ISBN 4324029881)

◎小林康昭, 勝見健. 土木和英辞典. 増補版.

東京, 近代図書, 1992.5. 482p. (ISBN 4765102424)

#### 518.52 廃棄物処理

◎海外廃棄物処理技術研究会編. 廃棄物英和・和英用語辞典.

東京, 中央法規出版, 1992.9. 317, 36p. (ISBN 4805808837)

#### 519 環境問題

◎学研・UTAN編集部編. 最新エコロジーがわかる地球環境用語事典.

東京, 学習研究社, 1992.11. 488p. (ISBN 4051062481)

◎中部経済連合会技術部編. 環境用語集.

名古屋, 中部経済連合会, 1992.6. 96p.

#### 520 建築

◎建築用語研究会編纂. 建築用語事典. 改訂22版.

東京, 学隆社, 1992.11. 375, 4p.

◎日本建築技術者指導センター編. 新しい建築用語の手びき. 増補改訂3刷.

東京, 霞ヶ関出版社, 1992.2. 266p. (ISBN 4760441921)

◎星和彦著. 建築・インテリアなるほど事典：カタカナ用語の由来がわかる.  
東京, トーソー, 1992.8. 231p. (Toso books, 4) (ISBN 4924618268)

#### 521 建築(日本) -- 歴史

◎近藤豊著. 日本建築史主要語辞典. 1.  
東京, 理工学社, 1992.11. 225p.(ISBN 484453016X)

#### 527 住宅建築

◎内田京治著. 住宅小事典：専門用語がわかる. 増補改訂.  
東京, 三一書房, 1992.3. 251, 18p. (ISBN 438092212X)

#### 537 自動車

◎GP企画センター編. グランプリ自動車用語辞典.  
東京, グランプリ出版, 1992.10. 395p. (ISBN 4876871264)

#### 538 航空

◎日本航空技術協会編. 航空技術用語辞典.  
東京, 日本航空技術協会, 1992.8. 206p. (ISBN 4930858755)

#### 540 電気工学

◎オーム社編. 電気情報英和辞典.  
東京, オーム社, 1992.6. 860p. (ISBN 427403402X)  
◎茂木晃編. 電気電子用語大事典.  
東京, オーム社, 1992.8. 1754p. (ISBN 4274034062)

#### 547 音響再生装置

◎オーディオ・ビデオ研究会編. 図解オーディオ・ビデオ用語辞典.  
東京, 日本工業出版社, 1992.5. 349p. (ISBN 4526031291)  
◎電波・テレコム用語辞典. 第5版.  
東京, 電気通信振興会, 1992.6. 412p.(ISBN 4807601644)

#### 547.48 データ伝送

◎情報通信研究会編. 情報通信用語事典.  
東京, ぎょうせい, 1992.7. 559p. (ISBN 4324028087)

#### 547.5 電波

◎電波用語研究会編. 電波辞典.  
東京, クリエイト・クルーズ, 1992.6. 309p.(ISBN 4990003144)

#### 548 情報処理

◎土岐秀雄編著. 英和英情報処理用語辞典. 新3版.  
東京, 日本理工出版会, 1992.9.771p. (ISBN 4890194363)

#### 548.2 電子計算機

◎大場五夫著. 最新コンピュータ用語英和对訳辞典.

東京, 技術評論社, 1992.10. 564p. (ISBN 4874085229)

◎伊東正安編. コンピュータ用語事典. 改訂2版.

東京, オーム社, 1992.6. 340p. (ISBN 4274077101)

◎中村義裕ほか執筆. 大学生のためのコンピュータ用語事典.

東京, 早稲田大学情報科学研究教育センター, 1992.4. 92p.

◎パソコン用語の基礎知識: 最新 ビジネスソフトウェア必携!!!

東京, エーアイ出版, 1992.4.334p. (ISBN 4871932109)

#### 549 電子計算機

◎岡本茂ほか著. 最新パソコン用語事典. 1992~93年版.

東京, 技術評論社, 1992.3.510p. (ISBN:4874084931)

◎ハイブリッドマイクロエレクトロニクス協会編. エレクトロニクス実装技術用語辞典.

東京, 工業調査会, 1992.1. 277p. (ISBN 4769310919)

#### 566.68 ハンダ

◎ソルダリング用語事典編集委員会編. 図解ソルダリング用語事典.

東京, 工業調査会, 1992.11. 506p. (ISBN 4769310935)

#### 578.4 プラスチックス

◎プラスチックス・エージ編集部編. 日中英プラスチック辞典. 第3版.

東京, プラスチックス・エージ, 1992.4.165p.

#### 586.1 難燃剤

◎日本防災協会編. 防災用語ハンドブック.

東京, 日本防災協会, 1992.9. 274, 6p.

#### 588 食品工業

◎食品ビジネス用語. 増補改訂版.

東京, 日本食糧新聞社, 1992.1. 626p.

#### 589.2 縫製業

◎村尾康子著, センイ・ジャナル編. 日中英・アパレル業界用語対訳ハンドブック.

大阪, センイ・ジャナル, 1992.7. 222p. (ISBN 4881220527)

#### 593 ファッション

◎C.M.キャラシベッタ著. フェアチャイルドファッション辞典. 新版.

東京, 鎌倉書房, 1992.10. 734p. (ISBN 4308005418)

#### 596.23 イタリア語(料理用)

◎町田亘, 吉田政国編. イタリア料理用語辞典.

東京, 白水社, 1992.11. 257p. (ISBN 4560000891)

#### 610 農業技術

◎農林水産用語研究会編. 農林水産用語対訳辞典: 和英/英和.

東京, ぎょうせい, 1992.3. 635p. (ISBN 4324032041)

#### 613.4 肥料

- ◎肥料用語事典編集委員会編. 肥料用語事典. 改訂4版.  
東京, 肥料協会新聞部, 1992.6. 303, 62, 100p.

#### 643.2 家畜繁殖

- ◎家畜繁殖学会編. 新繁殖学辞典.  
東京, 文永堂出版, 1992.8. 609, 27p. (ISBN 4830030402)

#### 649 獣医学

- ◎長谷川篤彦編. 獣医英和大辞典.  
東京, チクサン出版社, 1992.5. 1758p. (ISBN 4885006112)

#### 657 木材

- ◎日本材料学会木質材料部門委員会編. 木材科学略語辞典.  
大津, 海青社, 1992.7.360p. (ISBN 4906165419)

#### 660 水産学

- ◎金田禎之編. 総合水産辞典 : 和英・英和. 3訂版.  
東京, 成山堂書店, 1992.7. 827p. (ISBN 4425110935)

#### 670 商業

- ◎宇野政雄ほか編著. 現代商業・流通辞典.  
東京, 中央経済社, 1992.6. 349p. (ISBN 450261386X)

#### 670.93 商業通信

- ◎杉田敏編. ビジネス英語辞典.  
東京, ジャパンタイムズ, 1992.2. 303p. (ISBN 4789006182)

#### 670.95 商業通信 -- フランス語

- ◎平出价弘編. 経済フランス語辞典.  
東京, 白水社, 1992.10. 511p. (ISBN 4560000263)

#### 674 広告

- ◎奥山益朗編. 広告キャッチフレーズ辞典.  
東京, 東京堂出版, 1992.5. 425p. (ISBN 4490103085)  
◎日経広告研究所編. 広告用語辞典. 2版.  
東京, 日本経済新聞社, 1992.4. 166p. (日経文庫) (ISBN 4532012678)

#### 678 貿易

- ◎石田貞夫編. 貿易用語辞典.  
東京, 白桃書房, 1992.9. 555p. (ISBN 4561740880)  
◎東銀リサーチインターナショナル編. 貿易為替用語辞典. 6版.  
東京, 日本経済新聞社, 1992.5.228p. (日経文庫) (ISBN 4532012449)



## 680 運送

- ◎日通総合研究所編. 物流用語辞典. 4版.  
東京, 日本経済新聞社, 1992.7. 176p.(日経文庫) (ISBN 4532012392)

## 683 海事, 船舶

- ◎佐波宣平. 海事用語根源: 遺稿集.  
東京, 山県記念財団, 1992.1, 210p.
- ◎宮本栄編著. 図解船舶・荷役の基礎用語.  
東京, 成山堂書店, 1992.1. 355p.(ISBN 4425111117)

## 749.1 製版

- ◎沢田善彦著. プリプレス用語1000語: CTS・DTP・CEPS.  
東京, 印刷出版研究所, 1992.2.352p. (ISBN 4870861593)

## 757 デザイン

- ◎現代デザイン事典. 1992年版.  
東京, 平凡社, 1992.3. 274p. (ISBN:4582129102)

## 760 音楽

- ◎遠藤三郎著. 音楽用語・楽器名由来事典.  
東京, 日音, 1992.2. 127p.(ISBN 4401613783)
- ◎遠藤三郎編. 独仏伊英による音楽用語辞典: 速度・発想・奏法/用語. 改訂版.  
東京, シンコー・ミュージック, 1992.5. 198p. (ISBN 4401613309)

## 780 スポーツ

- ◎角山修司編. スポーツ用語: ビッグスポーツ・主要100スポーツ用語総覧 ルール・ゲーム進行・戦術から最新用語 最新版.  
東村山, 教育社, 1992.11. 1114p. (Newton database) (ISBN 4315512672)

## 803 言語学, 記号

- ◎亀井孝ほか編著. 言語学大辞典. 第3巻 世界言語編 下-1 ん〜ほ.  
東京, 三省堂, 1992.1. 1200p. (ISBN 4385152179)
- ◎亀井孝ほか編著. 言語学大辞典. 第4巻 世界言語編 下-2 ま〜ん.  
東京, 三省堂, 1992.1. 1221p. (ISBN 4385152128)
- ◎原口庄輔, 中村捷編. チョムスキー理論辞典.  
東京, 研究社出版, 1992.6. 592p.(ISBN 4327450898)
- ◎脇阪豊ほか編著. 記号学小辞典.  
東京, 同学社, 1992.11. 267p. (ISBN 4810200566)

## 903 文学

- ◎A.H.ラスほか著; 松島正一他訳. 古典・聖書・文学基礎知識事典.  
東京, 北星堂書店, 1992.7. 440p.

## J I S 用語規格制定の動き

情報源：“標準化ジャーナル” 1992年1月号-1993年12月号

### 審議が開始された J I S 案

標準物質用語 (制定)

Technical terms for reference materials

情報処理用語 (ローカルエリアネットワーク)(制定)

Glossary of terms used in information processing-Local area network

ジオテキスタイル用語 (制定)

Glossary of terms used in geotextiles

舟艇用語-計器 (制定)

Glossary of terms for boats

圧力スイング吸着(PSA) 装置用語 (制定)

Glossary of terms used in pressure swing adsorption(PSA) apparatus

### 近く制定・改正される J I S

B0101 ねじ用語 (改正)

Glossary of terms for relating to fasteners

B0112 鍛造用語 (改正)

Glossary of terms for forging

B0170 切削工具用語 (基本)(改正)

Glossary of common terms for cutting tools

B0172 フライス用語 (改正)

Glossary of terms for milling cutters

B0175 ブローチ用語 (改正)

Glossary of terms relating to broaches

B0181 数値制御工作機械用語 (改正)

Vocabulary for numerically controlled machine tools

B0182 工作機械-試験及び検査用語 (制定)

Machine tool- Test codes- Vocabulary

B3401 CAD 用語 (改正)

Glossary of terms used in CAD

C0201 ヒューズ用語 (改正)

Glossary of terms for fuses

D0101 自動車の種類に関する用語 (改正)

Glossary of terms relating to kinds of automobiles

E1001 鉄道線路用語 (改正)

Glossary of terms for permanent way

E1311 鉄道用分岐器類用語 (改正)

Glossary of terms for railway turnouts and crossings

E4001 鉄道車両用語 (改正)

Glossary of terms for railway rolling stock

F0012 造船用語 (船体編-船こく構造)(改正)

Glossary of terms for shipbuilding(Hull part - Construction)

- F0024 造船用語（船体編－試験・工作（改正）  
Glossary of terms for shipbuilding(Hull part - Testing and working practice)
- K3610 生体工学用語（生体化学用語)(制定)  
Technical terms for biological engineering (biochemistry)
- K6900 プラスチック用語（制定）  
Glossary of terms used in plastic industry
- M0103 ボーリング用機・器具用語（改正）  
Glossary of terms for core drilling equipments and tools
- S2091 家庭用燃焼機器用語（改正）  
Glossary of gas and kerosine appliances and accessories for domestic use
- X0008 情報処理用語（規制、安全性及び安全保護）（改正）  
Glossary of terms used in information processing(control, integrity and security)
- X0019 情報処理用語（アナログ計算)(改正)  
Glossary of terms used in information processing(analog computing)
- X0021 情報処理用語（プロセスインターフェース)(改正)  
Glossary of terms used in information processing(process interfaces between process computer systems and technical processes)
- Z3001 溶接用語（改正）  
Welding terms
- Z8113 照明用語（改正）  
Glossary of lighting terms
- Z9212 エネルギー管理用語（その2)(改正)  
Technical terms used in energy management(No.2)

#### 官報告示・発行されたJIS

- A0203-93 コンクリート用語（制定）  
Concrete terminology
- A8308-92 土工機械－基本的機種用の用語（制定）  
Earth-moving machinery - Basic types - Vocabulary
- A8403-93 ショベル系掘削機用語（改正）  
Glossary of terms for shovel type excavators
- A8423-93 グレーダの用語と仕様書書式（改正）  
Terminology and standard form of specifications of graders
- B0105-93 工作機械－名称に関する用語（改正）  
Machine tools - Designation - Vocabulary
- B0119-92 水車及びポンプ水車用語（改正）  
Hydraulic turbines and reversible pump turbines - Vocabulary
- B0135-93 クレーン用語－種類（改正）  
Glossary of terms relating to cranes - Kinds of cranes
- B0136-93 クレーン用語－性能・構造（改正）  
Glossary of terms relating to cranes - Ability and structure of cranes
- B0140-93 コンベア用語－種類（改正）  
Glossary of terms relating to conveyors - Kinds of conveyors
- B0141-93 コンベア用語－部品、付属機器ほか（改正）  
Glossary of terms relating to conveyors - Conveyor parts, accessories and

others

- B0148-93 卷上機用語 (改正)  
Glossary of terms for hoists
- B8824-93 氷蓄熱システム用語 (改正)  
Glossary for ice storage systems
- B9950-93 圧力スイング吸着装置用語 (制定)  
Pressure swing adsorption apparatus - Vocabulary
- C5603-93 プリント回路用語 (改正)  
Terms and definitions for printed circuits
- D0111-92 自動車懸架装置用語 (改正)  
Suspension of automobiles - Vocabulary
- D6304-92 自走クレーン用語 (制定)  
Glossary of terms relating to mobile cranes
- F0024-93 造船用語—機関—軸系、プロペラ及びウォータージェット推進装置 (改正)  
Shipbuilding - Machinery - Shafting, propeller and water jet propulsion system - Vocabulary
- F0045-92 舟艇用語—般体 (制定)  
Pressure boat - Vocabulary - Hull
- F0046-92 舟艇用語—ぎ装品 (制定)  
Pressure boat - Vocabulary - Fittings
- H0211-92 ドライブプロセス表面処理用語 (改正)  
Glossary of terms used in surface treatments by dry processing
- K0213-92 分析化学用語 (電気化学部門)(改正)  
Technical terms for analytical chemistry(electrochemistry division)
- L0208-92 繊維用語—試験部門 (改正)  
Glossary of terms used in textile industry -Testingi
- L0220-92 繊維用語—検査部門 (改正)  
Glossary of terms used in textile industry -Inspection
- R1600-93 ファインセラミックス関連用語 (制定)  
Glossary of terms relating to fine ceramics
- T0101-91 福祉関連機器用語 (リハビリテーション機器部門) (制定)  
Glossary of terms used in technical systems and aids for disabled or handicapped persons
- T8001-92 呼吸用保護具用語 (改正)  
Glossary of terms for respiratory protective devices
- X0007-92 情報処理用語 (プログラミング)(改正)  
Glossary of terms used in information processing(computer programming)
- X0020-92 情報処理用語 (システム開発)(制定)  
Glossary of terms used in information processing - system development
- Z0109-92 粘着テープ・粘着シート用語 (改正)  
Glossary of terms used in pressure sensitive adhesive tapes and sheets
- Z6000-92 マイクログラフィクス用語 (改正)  
Micrographics - Vocabulary

---

---

## 書評

---

---

「日本語学」

### 特集 語彙分類・意味分類

Vol.12 No.5, 4~74

明治書院, 1993年5月発行, 810円

---

---

#### 特集内容

---

---

分類とは何か……………池田清彦  
専門用語のソーラス（情報検索用ソーラスにおける  
専門用語および概念の分類と組織化）影浦 峡  
ソーラスのための語彙の意味分類をめぐって  
（「焼き魚」は魚か）……………荻野綱男  
意味分類体辞書の系譜……………木村睦子  
簡約日本語語彙の意味分野……………野元菊雄  
語彙分類の考え方……………田島毓堂  
食物の分類……………太田泰弘  
図書の分類……………岡谷 大  
特許分類と特許情報の検索について……………結田純次

---

---

私は図書館員であるので、現在の図書館にとつて、分類に関して何が問題であるのかをまず語ってみたい。

岡谷大氏も語っているように、現代日本の図書館ではほとんどのところでNDC（日本十進分類法）、DDC（デューイ十進分類法）、UDC（国際十進分類法）を使って主題情報の組織化を行っている。私が見るかぎり、これらの分類法は、列挙型分類表と語られ、複合主題を十分に表現するためには、はなはだ不十分である。主題情報の組織化のためには、まず私たちは文献内容を主題分析をする必要がある。この主題分析とそこから帰着するすべての主題の表現可能性こそが、私たちインデクサーの生命線であり、利用者サービスの拠点である。

たとえば、私たちが、タイトルに「労働市場での差別待遇の統計的モデル」を持つ文献を、「労働力の移住者－補充と選択－差別待遇－統計的モデル」と主題分析するならば、利用者の分類検索

支援のために、これらすべての主題を分類記号で表現したい欲求を持つことは、当然である。上記の三つの分類表は、基本的に時代遅れの列挙型分類法であり、表中にその項目が列挙されていなければ、これらの表現は不可能であり、事実上できない。分類項目をどのように細分化しようとも、原理的に不可能であるからだ。

そこで登場したのが、概念を諸ファセットに組織化し、そのファセット間を合成可能にする、ファセット分類法である。その代表的な例として、CC（コロン分類法）、BC2（書誌分類法2版）が挙げられる。それらは、原理的に諸ファセット間の主題合成を前提とするものであるが故に、複合主題が表中に列挙されていなくても、表現可能となる。

以上、集約するならば、図書館分類法のこれからの生命線は、複合主題をファセット理論によっていかに表現するかにある。

もう一つ、私たちインデクサーの課題は、言葉からの検索をより精度にするために、統制語彙集（ソーラス、件名標目表など）をいかに構築するかにある。私の現在の考えでは、統制語彙集構築の背後には、必ずファセット理論に依存した分類体系がなければならぬということである。なぜならば、上位語、下位語、関係語は、まさしく分類原理に依存するものであると思われるからだ。このように、まず、私の立場を表明して、以下、諸論稿の批評に入りたい。

池田清彦論文に次のような箇所がある。「我々は世界を観察している。観察している世界は本来的には変なるものであり、不変ではあり得ない。しかし、この世界を記述したとたん、記述には不変の同一性がコトバという形で不可避に孕まれてしまうのである。もし私が信じるように、不変の同一性が外部世界にないのであれば、それは我々の内部の形式としてある他はない。我々はこの内部の形式を使って外部世界を記述する。しかし、外部世界は不変であり得ず、形式は不変である。これは根源的な矛盾である」。

ソシュール理論から導き出された、この世界把握の考察は、まったく正当であり、私たちインデクサーも、分類体系の構築とは思想の構築にほか

ならないことを、心の底に銘記しなければならない。「いかなる分類も人間がする以上、客観的な方法などはない」と語る池田氏の思念から、「名は時間を生み出す形式である」ことをしっかりと把握し、分類することの意味を考え続けねばならないように思われた。

次に、影浦映氏が語る情報検索用シソーラスについて考えてみたい。影浦氏は、次のように語っている。「実際にシソーラスを構成するためには、さらに特定性の高いカテゴリーが設定されることが多い。その場合の基本的な方法としては、(1)一般の図書館分類法での分類に見られるような、主題分野に基づく方法と、(2)主題分野に依存せずに上記のカテゴリーを分類していく、ファセットによる方法、という二種類がある」。そして、影浦氏は、「ボトムアップの分類組織化作業」という項目で、用語の関係性を語っている。先にも語ったように、私の考えでは、たとえ全分野を扱う情報検索用シソーラスであったとしても、各主題領域に基礎づけられた詳細なファセット分類表が存在するならば、用語の選択と関係性は、容易にそこから引き出すことができると考える。そのためには、分類表は、BC2のように詳細で、システムチックな分析成型型でなければならないだろう。情報検索用シソーラス構築過程で、分類体系を眼中におかず、いくら用語を選択したとしても、そのシソーラスは、主題情報検索のために、必要かつ十分なものにはなりえないであろうというのが私の考えである。

太田泰弘氏は、『食べ物分類』と題して、クジラは、「けもの」か「さかな」か、「トマト」は、野菜か果実かと問うている。確かに、事象が体系のどこに位置づけられるかを問うことは重要なことではあるが、それ以上に私たちにとって重要な問題は、複合主題の位置づけである。「ビニールハウスで栽培するトマトに発生する害虫の駆除法」と主題分析された、複合主題は、どのように分類記号で表現するのか。UDCを始めとした従来の列挙型分類法では、若干の合成を認めたとしても基本的に破綻を来すと考える。

図書館員である岡谷大氏の『図書の分類』と題された論文も、ファセット分類について語るもの

の、複合主題の問題の核心を捕らえきれていない。岡谷氏は、「分類表の構造と概念の検討」という項目で、「既に学際分野、分類不能の図書の問題について述べた。このような現象が起きるのは、分類表が伝統的な学問分野という枠組みに縛られているためである」とのみ語っている。分類表の構造において、この伝統的な枠組みの解体も確かに必要だが、その解体は手法において容易である。私たちがここで心底から問わねばならないことは、再創出された学問分野内で、複合主題を合成可能にする内的構造ではないのか。岡谷氏はまた、「分類表と相関索引によるオンライン検索」という項目で、「コンピュータによる分類の直接的な利用は、分類表と相関索引とを相互に連動させる・・・プロセスとしては、図表2のようにことば(テーマ)を入力するとDCの相関索引がそのコトバの持ついくつかの観点を画面に表示する。利用者は、そのうち、最もテーマにふさわしいものを選ぶ。そうすると画面上にそのコトバが含まれる書誌レコードが分類記号の上位から順に表示される」と語っている。私は、この主題表示に満足はしない。なぜならば、DDCは、若干のファセット理論を取り入れているものの、それは継ぎはぎで、基本的に列挙型分類法であり、インデキシング段階で、主題分析結果は、取捨選択されて、DDC構造の貧弱さに矮小化されていると考えるから、構造的欠点のあるDDCから、どのようにコンピュータを使い、主題検索を行ったとしても、そこに表示される主題は、粗雑なものであることは分かりきっているのではないか。CRG(分類法研究グループ)の一つの重要な果実は、現在刊行中のBC2であると私は考えるので、多数の研究者にそのシステムチックなファセット構造を知っていただき、そこからの理論の飛躍をただただ私は願うばかりである。

光富 健一(東京理科大学記念図書館)

---

本号の入手については、下記にお問い合わせいただきたい。

明治書院

〒101 東京都千代田区神田錦町1-16

Tel.03-3292-3741

# 雑誌紹介 TERMINOLOGY

*International Journal of Theoretical and Applied Issues  
in Specialized Communication*

## 1. 背景

近年の学術情報の爆発的増大にともなう、言語的コミュニケーションを介した学術情報の流通の重要性はますます強く認められるようになり、専門用語の重要性もクローズアップされることとなった。その結果、専門用語の研究は、言語学や自然言語処理研究、図書館・情報学など、伝統的に専門用語を研究対象としてきた領域でそれぞれに活発となり、また、様々な研究領域において専門用語辞書の編集や専門用語データベースの作成などが盛んに行なわれるようになった。このような状況を反映して、専門用語研究に関する著作が出版され、専門用語をテーマとする国際会議が定期的開催されるようになり、さらに、Infoterm や ISO/TC 37、日本の専門用語研究会のように、専門用語に関連した情報の相互交換や専門用語管理関連技術の標準化に関わる機関も設立され、活発な活動を行なうようになった。

けれども、専門用語に関わる諸研究の成果発表を主な目的とした国際的な雑誌は、強く求められていたにもかかわらず、これまでのところ刊行されていなかった。TERMINOLOGY 誌は、こうした要請に応えるために1994年から刊行される学術雑誌である。専門用語関連の諸機関で活動している研究者や実務家を第一の読者および投稿者として想定していること、後述するように、各国の様々な機関の活動の紹介などにも積極的にスペースをさいていく予定であることといった点で、現在ある専門用語関連の諸機関と密接な関連をもつことになるが、雑誌自体は、特定の学会や団体からは独立したものととして刊行される。

## 2. 射程

専門用語研究は学際的な性格をもっているため、実際に専門用語の研究として分類される範囲は非常に多岐にわたる。TERMINOLOGY 誌であつかう中心的なテーマを以下にあげておこう。

理論 — 専門用語の振る舞いや言語的特性、造語や語構成など、専門用語を対象としたあらゆる言語学的研究、コミュニケーションにおける専門用語の役割や認知的側面、概念の分類や組織化およびそれらと専門用語との関係など。用語一般に関わるものも特定の領域に限定した専門言語に関わるものも、さらに、単一言語を研究対象とするものも多言語を対象とするものも含む。

応用 — 機械翻訳やキーワード抽出、用語の自動認識などの計算言語学的応用、専門用語処理および管理に関連するデータベース・ソフトウェアや知識表現・知識伝達に関するトウ

ルと諸技術、エキスパート・システムにおける専門用語の役割などといった計算機関連の応用、専門用語辞書やシソーラスなどに関する理論や作成技術、索引作成や情報検索における専門用語の役割などの情報学的応用を含む。

*TERMINOLOGY* 誌では、現在行なわれている専門用語の研究のみでなく、将来発展するであろう専門用語に関わる研究のすべてを潜在的な掲載対象と考えている。したがって、アプローチや言語、あつかう側面などによって論文掲載対象を制限することはない。

また、論文のほかにも、研究進捗報告や短信、書評、専門用語関係の製品紹介（コーパス、専門用語辞書、専門用語管理・処理に関わるソフトウェアなど）、各国の専門用語関連機関やさまざまな専門領域で専門用語活動に関わっている機関の活動紹介などにもスペースをさき、研究成果の発表を主体としながら、実践的活動に関わる情報交換の場としても役立つことを目指している。

### 3. 編集体制

編集者は、オランダのアムステルダムと米国オハイオ州コロンバスでそれぞれ専門用語管理の実際の活動に関わっている Helmi Sonneveld と Kurt Loening であり、英国マンチェスター大学科学技術研究所で言語学的立場から専門用語研究を行なっている Juan C. Sager がコンサルタントとして編集に参加する。また、準編集者として欧米日からの合計 5 名が編集を助け、さらに、言語学、情報科学、情報学などの異なる視点から専門用語の研究に関わっている約 25 名の研究者（うち日本からは 1 名）が編集顧問となって、論文の査読や査読者の推薦などを行なうほか、雑誌の専門的内容や性格に関して助言するというかたちで参加し、専門用語研究の学際的な性格に十分に対応できる体制を整えている。現在のところ年 2 回の刊行を予定しているが、軌道に乗り次第、年 4 回の刊行に移行することを計画している。

### 4. その他

原稿の言語は英語を基本とするが、場合によってはスペイン語、フランス語、ドイツ語も掲載対象として考慮する。（日本語に関する関心は高いが、日本語での執筆は今のところ受理されない。）論文執筆案内は、

*TERMINOLOGY* Helmi B. Sonneveld, c/o Topterm, W.G. Plein 278

NL 1054 SE Amsterdam, The Netherlands (オランダ)

電話：+31-20-6851194 ファックス：+31-20-6851591

または

東京都文京区大塚 3-29-1 学術情報センター研究開発部

影浦 峽 (かげうら きょう)

電話：03-3942-6968 E-Mail：kyo@nacsis.ac.jp



から入手できる。

また、*TERMINOLOGY* 誌の購読は、日本の取り扱い業者を通すか、または、直接下記へ申し込むことによって可能である。

John Benjamins Publishing Co. Subscriptions Department, P.O.Box 75577

1070 AN Amsterdam, The Netherlands (オランダ)

ファックス：+31-20-6739773

本誌の刊行により、異なる側面から専門用語の研究に携わってきた研究者の間のコミュニケーションが活発となり、専門用語研究が一つの領域として発展すると同時に、関連諸領域に研究成果が有効なかたちでフィードバックされるようになることが期待される。

学術情報センター 研究開発部

影浦 峽 (かげうら きょう)

## 「専門用語研究」投稿規定（案）

1. 「専門用語研究」（以下会誌という）には、下記の内容に関する論文・記事を掲載する。
  - ・ターミノロジーの理論と応用
  - ・専門用語集の作成技術
  - ・その他、専門用語に関するもの
2. 会員は、会誌に自由に投稿することができる。編集委員会からの依頼により執筆することもできる。

### 3. 原稿の書き方

#### 3.1 原稿用紙

原稿は、通常のA4サイズ横書き原稿用紙（20字×20字）か、ワードプロセッサを使用する。ワードプロセッサを使用する場合は、A4用紙に1行20字、20行で作成し、印刷する。また、可能であれば、MS-DOSテキスト形式でフロッピーに保存し、印刷物と一緒に送付する。

#### 3.2 原稿の長さ

全体で図表ほかを含めて、原稿用紙16枚から32枚とする。原稿用紙4枚で刷り上がり1ページとなる。執筆依頼時に別途指定ある場合はそれに従う。

#### 3.3 原稿の仕様

原稿には、以下の内容を記入する。

- ・和文と英文の、表題、著者名、所属
- ・和文の、抄録(250字前後)とキーワード(5から10語)  
(可能なならば、英文の抄録(150語前後)とキーワード(5から10語)も)
- ・本文(ページをつける)
- ・図表など(番号と表題をつけ、朱筆で文中に挿入位置を指定する)
- ・引用文献(本文中に肩付き数字 1)2)・・・を記入する)
- ・参考文献、参考図書(本文を読む上で参考になるものがあれば)

### 4. 原稿の受理、査読

投稿原稿は、当研究会事務局が受け付けた日を受付日とし、会誌編集委員会で査読を行なう。査読結果をもとに、会誌編集委員会で掲載の可否を決定する。委員会で内容・表現などについて修正が必要と認めた場合、執筆者に修正依頼する。

### 5. 校正依頼

執筆者に初校を依頼する。この際、大幅な修正・加筆は行なわないこと。なお、論旨に差し支えない範囲で、編集委員会が内容の変更を求めることがある。

### 6. 掲載原稿の扱い

会誌に掲載された原稿、フロッピーは返却しない。

### 7. 謝礼

執筆者には、掲載された会誌10冊を無料贈呈する。これ以上および抜刷を希望する場合は、有料となる。校正時に申し込むこと。

### 8. 著作権

本誌に掲載された論文、記事の著作権は、当研究会に帰属する。

### 9. 原稿提出先

専門用語研究会誌編集委員会

## 専門用語研究会

### 目的

専門用語研究会は、専門用語全般に関して研究を促進し、情報交換の場を提供し、会員相互の交流を図って、専門用語に関する研究や技術の向上に貢献することを目的としています。

### 活動内容

1. 研究会、講演会、分科会などを随時開催します。
2. 刊行物として、会誌を年2回、ニューズレターを随時、発行します。
3. Infoterm、ISO/TC37等との連絡を密にし、国際交流活動を推進します。
4. このほかこの会の目的達成に必要な活動を行います。

### 運営

役員として、会長、理事、監事を置きます。

専門用語に関心を持つ個人または機関は、どなたでも入会できます。

### 年会費

個人会員 5,000円  
機関会員 30,000円

### 編集後記

◆現状で見る限り、「ただ便利である」が、すべてに優先しているのを非常に強く感じています。言葉においても同様で、簡略化が走りすぎたために、粗末に扱すぎていると思っています。「音で聞いても、目で見てもっと美しい日本語でありたい」との視点から、現在の日本語を、改めて考え直す時期にきており、やはり、このことは、各方面において、まずは認識され、賛同を得て、少しずつでも改善の方向に向かいたいものと考えている次第です。(中山)

◆2月の編集委員会で、“好ましくない長音のカット”と題する新聞記事が話題になりました。筆者は、「長音を意識的にカットしようとする妙な傾向がでてきている。(中略)これという根拠もなく、新しさだけを追うようなこんな言葉がなぜ生まれたのか」「一部の学会で発音を統一的に決めたからだとも言われているが、日常会話の中でだれもが長音化して使っているのをみると、一般では歓迎されていないものであることがわかる」と述べています。

『学術用語標準化の手引』では、「3音以上の場合には語尾に長音符号を付け、2音以下の場合には付ける」と規定していますが、長音の扱いについては、本号柴田、中山両氏も触れておられるように用語集作成の際には避けて通れないむずかしい問題です。

◆次号第7号は昨年未開催のシンポジウム報告、第8号は「小特集 専門用語集の作り方」のその2として事例を取り上げる予定です。(戸塚)

### 編集委員会委員

太田 泰弘 文教大学  
加藤 信哉 東京大学附属図書館  
後藤 智範 神奈川大学理学部  
四ノ宮明夫 大正製薬研究開発計画部  
戸塚 隆哉 紀伊國屋書店電子情報部  
(委員長)

中山 亮一

### 専門用語研究 第6号

(1994年2月28日発行)

発行人 大塚 明郎

発行所 専門用語研究会

〒102 東京都千代田区一番町4-6

一番町中央ビル2F

日本総合研究所(JIST)内

Tel.03-3262-8956

Fax.03-3262-8960